2013 年 7 月 1 日

青森大学・短期大学ニュース No.24

学生中心の大学をつくる

学長　崎谷康文

はじめに

昨年 4 月、第 7 代の青森大学学長に就任し、「青森大学ルネッサンス」を進めよう、と呼びかけ、青森大学の再興と新生を目指し、大学の運営、教育研究、社会貢献など大学の活動全般にわたり改革を進めてきた。「青森大学ルネッサンス」の推進に当たり、今最も重要なことは、青森大学を「地域とともに生きる大学」へ発展させることである。青森大学は、地域との相互交流により地域コミュニティから信頼され、地域再生の中核となる大学、すなわちセンターオブコミュニティ（Center of Community）へ向かって、前進し続けている。

大学の活動の充実を図り、地域とともに生きる大学としての魅力を高めるには、何よりも教育機能の質的な向上が重要な課題である。本年度から、教養科目を再構築して「青森大学基礎スタンダード」を導入することができた。教職員すべての一致協力により、「青森大学基礎スタンダード」は、円滑に開始され、次第に成果が上がりつつあるが、継続して改善工夫していく必要がある。青森大学のカリキュラムと教育方法の改革は、「学生中心の大学」をつくっていくための根幹となる活動である。

学生中心の大学とは

大学の構成員は、学長を含む教員、職員そして学生である。教員及び職員は、大学に雇用され、給与を得て勤務するが、学生は、授業料等を払い、一定の年限の間、教員から指導を受け学び、学位を得て卒業する。学生は、通過する者であるが、大学が大学である所以は、教員とともに、あるいは教員の支援を受けて、学生がともに学ぶ主体として存在するところにある。つまり、大学の存立基盤は、学生である。学生と教員が、ともに学ぶ者として、学問を究めていくことが大学の原点であり、だからこそ、自立した大学という組織が特別に認められている。

近年の大学の発展において、研究者としての大学教員という立場が重んじられてきた。しかしながら、大学への進学率が高まり、大衆化が進むに伴って、大学は、その性格、特色に応じて、適切な機能分化が必要になってきている。青森大学は、大学は学生のためにあるという原点に立ち返り、学生に対する教育指導に重点を置く大学へと転換し充実を図っていかなければならない。

青森大学を本来の姿に戻し、未来へ向け発展していくため、学生中心の大学をつくることは、急務である。

学生中心の大学をつくるための教育改革

・青森大学の基本理念から

青森大学の建学の精神と基本理念から考えれば、青森大学本来の使命は、地域の子弟を広く受け入れて、有用な人材に育てるため実践的な教育を行い、世に送り出すことである。大学の任務は、教育、

研究と社会貢献の活動を行うことであるが、青森大学は、教育、研究及び社会貢献の活動の中心に教育機能を据えて充実活性化を図り、地域とともに生きる大学として、脱皮していかなければならない。

青森大学へは全国各地から応募があるが、入学者の 6 割以上が青森県内の高校の卒業生である。学生の能力や個性は、近年、多様化しており、多様な学生すべてに対して、入学時から、学問に対する好奇心と探究心を育て、学生自らが主体的に学んでいくことができるよう、基礎学力、技術及び専門知識を指導していく必要がある。青森大学は、伝統的に、教員と学生が親密なコミュニケーションを図り、ゼミなどで親身な指導を行い、就職サポートも丁寧に進めている。このような努力の成果もあり、極めて高い就職率が続いている。

・３つの力を育てる

現状に甘んじることなく、時代の著しい変化に対応しつつ、教育内容と教育方法の改革に取り組むことが求められている。予測困難な時代においては、新たな課題や答えのない問題を発見してその原因や最善解を導くために必要な専門的知識と汎用的能力が必要である。私は、大学がこれからの社会で活躍できる人材を育てるには、「生涯をかけて学び続ける力」「人とつながる力」「自分自身を見据え、確かめる力」の３つの力を身に付けさせることを目指すことが重要であると考える。これら３つの力は、教員がこれまでと同様の形の授業等を行うだけでは、なかなか備わらない。学生の能動的な意欲を引き出せるよう、教育に工夫を凝らし、学生自らが主体的に学業に取り組む姿勢を示すようにしなければならない。

・基礎スタンダードの導入

本年 4 月から導入した「青森大学基礎スタンダード」は、これまでの教養科目を再構築したものである。まず、確かな教養を身に付けさせるため、教養コアとして、新たに、学問のすすめ、人間と文化、社会と環境という科目を設定した。これらの科目を受講するに当たっては、4 学部の学生が混在する 5 人のグループが、議論をしたり、まとめて発表したりという作業が随時課される。これにより、学生のコミュニケーション能力、協力する態度や発表する能力などが培われ、学問とは何かを自分なりに見つけ、新たな課題に挑戦する意欲を引き出そうとしている。さらに、技能コアとして、英語、体育実技、情報スキル、キャリアデザインについて必修とし、実践スキルを身に付けさせる教育を進めている。

・カリキュラムの体系化と教員自身の意識変革

忘れてはならないのは、学生が変わるためには、真っ先に教員が変わらなければならないことである。「青森大学基礎スタンダード」の改革につなげ、専門科目について精選、合理化を行い、基礎から専門への連携を図り、カリキュラムの体系化を行うことを計画しており、4 学部すべての教員が共通理解を持って協力して推進していく必要がある。つまり、すべての教員は、傍観者になることはできず、責任ある当事者になるということである。

これまで、科目の設定や教育の内容について、何を教えることができるか、という教員本位の考え方が横行してきたきらいがあるが、今後は、何を教えるべきか、何を身に付けさせるべきかという学生本位の立場に立つことが必要である。何よりも学生の利益になることを目指し、カリキュラムの体系化と教育方法の改革を進めていかなければならない。なお、カリキュラムの体系ができる限り合理的に示されるようにするには、授業科目のナンバリングについて検討を進める必要がある。

・教育方法の抜本的改革

青森大学基礎スタンダードの導入に伴い、専門科目を含むすべての科目について、シラバス（授業

計画）の改善を進めなければならない。学生の能動的学修（アクティブ・ラーニング）を促すよう、課題や到達目標を示す、評価の仕方を明示するなどの改善を継続する必要がある。学生が教室の中でディスカッション、グループワーク、プレゼンテーションなどを行い、また、教室外で体験的な活動を行うような授業へと工夫改善が必要である。基礎的な知識や技術の指導は、講義や演習が基本になるとしても、双方向の授業、実験、実技などを取り入れ、学生の意欲と関心を喚起する工夫が必要になってくる。

学生一人ひとりがどのように学んでいるか学生自身、担当教員等が点検確認して改善できるようにする、学修ポートフォリオを導入して改善を進め、また、教員の指導記録の作成も求められる。教員一人ひとりがどのように授業の準備を行い指導し評価したか確認し次の改善へつなげることが大切である。

学生の能動的な学習を支援し、また、教員の指導方法の改善を支援するなどの機能を持つ「学習支援センター」を設置することを考えたい。

現在設定されているキャップ制、進級基準等を踏まえ、適切な科目取得についての指導、評価の基準の明確化と均衡のとれた運用が必要である。そのためにも、ＧＰＡ（Grade Point Average）を早急に導入したい。また、補講、再試験等について工夫改善を図っていく必要がある。さらに、スチューデント・アシスタント（ＳＡ）、初年次教育、補習教育（リメディアル教育）等を充実させ、各学部横断の授業研修等を当たり前のこととしなければならない。

カリキュラム改革と教育方法の改革（ＦＤ）に当たり、地域貢献活動を教育内容に取り入れていくこと、学生の共同学習を進めていくことなどに特に留意したい。

学士課程教育の質的向上のために必要なこと

・学長のリーダーシップによる全学的教学マネジメント

学生中心の大学をつくるには、各学部の特色を生かしながら、大学全体の魅力の向上のために一致協力する体制が必要である。全学的な教学マネジメントを進めるためには、学長のリーダーシップにより、教務委員会、ＦＤ委員会などの機能を生かしつつ、各学部長や各学部からの教員の力を結集して、改革の方針や方向を確認していかなければならない。基礎スタンダードの充実、専門科目の一層の体系化，ＧＰＡの確立など、重要な課題に果敢に取り組んでいく必要がある。

・学士課程教育の基本方針の確立

学士課程教育を改革して魅力あるものにするには、「学位授与」（ディプロマ・ポリシー）、「教育課程編成・実施」（カリキュラム・ポリシー）、「入学者受入れ」（アドミッション・ポリシー）の三つの方針を明確にしなければならない。学位授与の方針、教育課程の編成・実施の方針及び学修の成果に係る評価等の基準（アセスメント・ポリシー）を一体的なものとして確立し、具体的に実施していく必要がある。青森大学のこれらの方針について今一度見直し、よりよい方向へ改善していくことが必要である。

・教員と職員の連携協力体制

学生中心の大学として教育を進めるには、教員と事務局教務課等の職員が連携協力する体制が必要である。事務局職員は、大学について、教育課程について、学生への指導の在り方について、しっかりと知識と技術を身に付け、事務の遂行に生かしていく必要がある。

・教育環境の整備

学生中心の大学をつくるためには、学び舎が教育環境として快適なものでなければならない。青森大学は、全体としては、豊かな自然に囲まれて、落ち着いた雰囲気の学園であるが、校舎や広場などの手入れや修理が必ずしも十分に行われてはいない。老朽化したり、短期大学や大学院が廃止になったりしたことなどに対応が追い付いていない。しかしながら、学生の声も聴きながら、教育環境の整備を進めていくことは急務である。地域の人たちも利用できるような「集いのスペース」を設置し、また、学生の主体的学習を援助するための教室や機器などの整備も求められる。

・部活動・サークル活動の改革と充実

本年４月に、青森大学としての部活動・サークル活動の基本方針を部長会で確認した。部活動・サークル活動は、教育課程外の活動であり、大学の管理下にあるが、学生の任意参加による、自主的、自発的な活動である。学生の学業、人間形成に資するものとして、部活動・サークル活動が健全に行われることは望ましいことであり、そのような活動に学生が参加することは奨励されるし、できるだけ裾野を広げていきたい。ただ、忘れてはならないのは、部活動やサークル活動は、正課の教育を補完する機能を持つが、学業に優先することはなく、学業の代わりになるものではないということである。

ついでながら、私自身、自らの意志により高校、大学と柔道部において修行を続けたことが私の人間形成につながったと考えている。

・学生への経済的支援

我が国の経済、特に地方経済は厳しい課題に直面しており、青森県をはじめ東北地方の大学への進学率は、全国平均よりかなり低い。大学への進学率は、ＯＥＣＤ諸国の平均が 62%、我が国の平均が 51%、そして青森県が 41%である。大学で学ぶことで将来の可能性を広げていくことができれば、地域や我が国の発展に貢献できる能力を持ち、社会で活躍する人間へと成長していくことができる。進学率が高まることで、我が国の人材の強み、厚みが発揮でき、我が国の再生・活性化が進むと考えられる。青森大学は、経済的に就学が困難な学生や学業成績が優秀な学生に対する奨学制度を設けている。国の私学助成は、貧弱な状況が続いているが、日本学生支援機構による貸与制の奨学金は整えられており、様々な制度を活用し、できる限り支援を図っていきたい。

学生中心の大学における教員の責務について大切なこと

・教育と研究、社会貢献について

今日の大学の果たすべき役割は、教育、研究及び社会貢献である。青森大学は、地域とともに生きる大学として、教育、研究及び社会貢献の活動を積極的に進める必要がある。教育、研究及び社会貢献の活動は、総合的にとらえる必要があるが、青森大学の本来の使命として、教育に重点があり、すべての教員が教育活動にしっかり取り組む必要がある。東京大学が秋入学を提唱し、4 学期制を導入しようとしているのも、グローバル人材を育てる教育改革のためである。

もちろん、大学の教員は、学問の世界の一員であり、研究活動を怠ってはならない。積極的な研究活動、そして社会貢献活動を行う教員が指導してはじめて大学の教育であると、学生が感じ理解することが重要である。科学研究費をはじめ研究費の獲得に努力したい。

・学生の主体性を引き出すこと

学生中心の大学にするということは、学生の負担を少なくすることではない。学生の短期的な満足

のみに応えるような迎合的なものにすることではない。在学中に高い付加価値を身に付けさせ、自立した人間として成長させ、卒業生として送り出すことが、大学の社会的責任である。

学び舎として明るく楽しい雰囲気を醸成し、その中で、学生が、前向きに学業に取り組むことができるようにする必要がある。授業の事前準備、課題についての発表などを含む授業の受講、事後の復習と確認など、学業に関する負担は増えるが、資料の調査、読書、思考のまとめ、学生同士のディスカッション、教員との対話、質疑応答などの活動が、関心と意欲を高め、成就感をもたらせば、負担が増えることを苦とせず、積極的、主体的に学修に取り組んでいくであろう。

教員は、学生の主体性を引き出すための授業展開や課題の与え方などについて大いに工夫を凝らさなければならない。教員の側としても、教員一人ひとりの努力に加え、チームとして協力体制を組んで、教育方法を改善していくことが必要である。

学生に、社会において生き抜く力を備えさせるには、厳しさや苦しさに耐えて学業を続けることが自らの能力を高め、将来につながると自覚させていく必要がある。大学生は、自己規律を持って自ら努力する必要があるが、努力すればしただけ成果が身に付き将来に生かせると考えるように導いていきたい。教員が真剣に学生の未来を考えて教育に当たるという、正攻法を大事にしたい。青森大学は、教員と学生のコミュニケ―ションが親密で、親身な指導を行ってきている。この伝統を生かしながら、学生が能動的に学業に立ち向かっていくようにしたい。

次に掲げるのは、4 月の部長会において確認された、青森大学の部活動・サークル活動についての基本方針である。学生生活の充実のため、すべての教職員の共通理解が必要であるので、今一度確認してほしい。

青森大学の部活動・サークル活動について

学長 崎谷康文

１ 大学の本来の目的は、正規のカリキュラムの下での体系的、組織的な教育により、学生に教養や専門知識を身に付けさせ、道徳性を育てる人間教育である。したがって、部活動・サークル活動は、教育課程外であるが、正規の教育が目的とする人格形成に資するものでなくてはならない。学生の本分は学業にあり、本分を確実に果たしてこその部活動・サークル活動でなければならない。

２ 部活動・サークル活動は、学生の自主的、自発的な参加により行われる、正規の教育課程外の活動である。学生にとって参加は任意であるが、スポーツや文化及び科学等に親しませ、学習意欲の向上や責任感、連帯感の涵養等に資するものであり、このような教育的な意義から、学業と両立する範囲で多くの学生が参加することは、奨励される。できる限り多くの学生が部活動・サークル活動に気軽に参加できるよう、すそ野を広げていかなければならない。

３ 部活動・サークル活動は、大学の正規の教育課程には含まれないが、教育的な意義にかんがみ、大学の管理下において行われなければならない。部活動・サークル活動の運営は、学生の主体性に基づき行われることが基本であるが、学校の管理下の教育の一環であり、大学は、教員を顧問や部長に充て、安全の確保など教育上の責務を果たす必要がある。

４ 部活動・サークル活動は、あくまで正規の教育課程外の活動であり、部活動・サークル活動に参加してスポーツ等に親しむことで、学習意欲の向上を図るなど相乗的な効果はあるが、正規の教育の代

替とはならず、補完する役割を持つ。
５ 部活動・サークル活動の内容であるスポーツや芸術などの技術等の指導は、教職員が直接行う必要はなく、学生の中の上級者や外部の指導者が指導し、地域の施設等との連携協力を図ることが望ましい。大学の教職員が監督やコーチ等として専門的な技術の指導をするのは最小限とし、卒業生や外部コーチの指導を中心にし、学生の主体性を育てたい。
６ 重点的に強化を図る必要がある部活動・サークル活動について、特待生としての新入生募集は、できる限り抑制する。また、各学年への進級に際しては、継続するかどうか等につき、学業成績等に基づき厳正に審査する。

次のような点を十分に心得ておく必要がある。
１ 勝利至上主義はやめなければならない。対校試合や大会で勝つことや優勝することを目指し、練習を重ね鍛錬するのは、当たり前のことであり、それにより、技芸が向上し、仲間の連帯感が育つ。しかし、結果として負けるとしても、それをよき糧としてさらに努力しようとの気持ちを持つことが大切である。勝つことが目的となり、負けることを受け入れられなくなってはならない。勝つことを目指すことは、技芸を伸ばし人間として成長していくという目的に対する手段に過ぎない。
２ 監督やコーチは、学生が学ぶべきことは自分が教えるスポーツや芸術活動だけだと思ってはならない。自分の担当は人間形成のごく一部であることを自覚し、担任やゼミの指導教員等との連携協力が必要である。
３ 監督やコーチが学生を支配し服従させようとすることは間違っている。自分の思い通りに育てようとし、自分がすべての責任を持つなどと考えてはならない。学生が自発的、主体的に意欲を持ち努力するように仕向け、根気よく見守ることが必要である。大学にいるときによい結果を出すことより、社会に出て、生涯を通じて、人間として成長することが大切である。
４ 大学は、プロのスポーツ選手や芸術家を育てる予備校でも専門学校でもない。多くのスポーツや芸術活動などについて、大学の部活動・サークル活動を通じ能力を高め、就職活動につなげていくこともあるが、今は、企業は、運動能力などにより採用するのではなく、組織の一員としての基礎力を部活動・サークル活動により身に付けたかどうかを判断する。部活動・サークル活動を行う学生の大部分は、自分の趣味や教養として、仲間づくりの場として、将来の学習習慣の形成にもつながるような活動をしているのであって、部活動・サークル活動がすべてと考えるのは、ゆがんだ姿である。人間形成を忘れ、部活動・サークル活動でいい成績を上げれば就職なども何とかなるという考え方は、改めなければならない。
５ 地域からの志願者を育てるのが教育者の在り方の基本と考える必要がある。学校法人あるいは大学が、名誉や宣伝あるいは自己満足のために全国から優秀な選手を集めることを競う風潮は止めたい。
６ 部活動・サークル活動の在り方については、特に青森山田高校とは、同じ考え方の下、一層の連携協力に努め、青森大学への志願者・入学者の増大を図る。

学長の活動（平成２５年１月～６月）

[随筆・評論等]

青森大学ホームページの学長ブログ

随想「大空を見上げて」

第１０回「新しき年のはじめに」　第１１回「歌舞伎の継承について思うこと」

第１２回「復興に向けて」　第１３回「新入生を迎えて」　第１４回「今年の桜」

第１５回「新緑を愛でる」

評論「学びの温故知新」

第９回「学習指導要領のはどめ規定」　第１０回「学力低下の衝撃と教育課程の見直し」

第１１回「『学びのすすめ』の再評価」　第１２回「生徒指導の意義」

第１３回「『生徒指導の手引』から『生徒指導提要』へ」

第１４回「暴力否定を教えること」

「教育プロ」（株式会社 ERP 発行）掲載の「時評」

「文化教育行政における政と官」（平成 25 年 1 月 3 日号）

「部活動の在り方」（平成 25 年 3 月 5 日号）

「教育委員会制度の改革」（平成 25 年 5 月 7 日号）

「JAPAN ICOMOS/INFORMATION 9 期 1 号」（日本イコモス国内委員会）（平成 25 年 3 月）への寄稿

「青森市小牧野遺跡の保護に関する条例について―遺跡と緩衝地帯の一体的保護」

[講師等]

青森県立保健大学ＦＤ研修会（講演「学ぶことと教えること」1 月 9 日）

[社会的活動等]

公益財団法人文化財建造物保存技術協会理事（理事会 3 月 1 日、理事会 6 月 10 日、理事会 6 月 17 日）

公益財団法人がん研究会評議員（評議員会 6 月 19 日）

姫路城大天守保存修理検討会姫路城大天守登閣者対策部会（姫路市）部会長（部会 1 月 31 日、部会 5 月 16 日）

姫路城大天守保存修理検討会（姫路市）副会長（検討会 2 月 19 日）

日本イコモス国内委員会監事（理事会 3 月 16 日、理事会 6 月 15 日）

全学の動向

外部資金の獲得状況

科研費獲得状況（平成 25(2013)年度）

研究者	研究テーマ	補助金額	助成区分
（研究代表者） 経営学科 石塚　ゆかり　准教授	日韓の苦情とクレームに関する社会言語学 研究－ビジネス現場と医療機関を中心に－ （前年度からの継続研究）	1,040　千円	若手研究(B)

（研究代表者） 社会学科 澁谷 泰秀 教授	高齢者の社会情動的選択性とリスク志向性が及ぼす生活の質への影響 （前年度からの継続研究）	650 千円	基盤研究(C)
（研究代表者） 社会学科 柏谷 至 教授 （研究分担者） 社会学科 澁谷 泰秀 教授 中村 和生 准教授 佐々木 てる 准教授	環境配慮行動における文化的フレームと意思決定モデルとの統合的アプローチ （前年度からの継続研究）	2,080 千円	基盤研究(C)
（研究代表者） 薬学科 中田 和一 教授	反射波遮蔽フェンスによるローカライザの積雪障害の抑制に関する研究	1,300 千円	基盤研究(C)
（研究分担者） 社会学科 澁谷 泰秀 教授	郵送・インターネットによる実験的な職歴調査の実施 （前年度からの継続研究）	256 千円	奈良大学 （吉村治正） 基盤研究(C)
（研究分担者） 社会学科 澁谷 泰秀 教授	社会情動的選択性から見た高齢者のソーシャルネットワークに関する研究 （前年度からの継続研究）	767 千円	秋田大学 （渡部 諭） 基盤研究(C)
（研究分担者） 社会学科 柏谷 至 教授 櫛引 素夫 准教授 佐々木 てる 准教授 社会福祉学科 田中 志子 准教授 ソフトウェア情報学科 小久保 温 准教授 坂井 雄介 准教授	電子エコマネーを活用したボランティア・コーディネート支援ツールの開発 （平成 26 年 3 月 31 日まで）	1,530 千円	八戸大学 （石橋 修） 基盤研究(C)
計	7 件	7,623 千円	

その他の研究助成金（平成 25(2013)年度）

研究者	研究テーマ	助成金額	交付機関等
（研究代表者） 薬学科 上田 條二 教授	地域薬局の役割に関する研究	1,000 千円	㈱医薬品情報センター
（研究代表者） 薬学科 齋藤 俊昭 准教授	第1類医薬品の販売状況と適正使用に関する研究	1,000 千円	㈱医薬品情報センター
（研究代表者） ソフトウェア情報学科 小久保 温 准教授	インターネット社会調査と多様化する情報端末―スマートフォン、タブレット端末時代の社会調査に向けて	600 千円	財団法人 電気通信普及財団

（研究代表者） 社会福祉学科 船木 昭夫 教授	平成 25 年度自殺防止対策取り組み検証事業 （青森県自殺対策検証研究会）	4,446 千円	青森県
(研究代表者) 社会学科 菅　勝彦　教授 (研究分担者) 柏谷　至　教授 社会福祉学科 田中志子　准教授	郊外型住宅団地における地域課題とコミュニティ再生に関する調査研究 (H.25年度)	402千円	青森学術文化振興財団
計	4 件	7,046 千円	

出張講義などの実施状況

平成 25 年度の出張講義は、平成 25 年 7 月 1 日現在で派遣教員は 9 名、全体の講義開講は 14 回となっている（依頼機関 は 11 機関）。

NO	依　　頼　　先	講義日	氏　名	学　科	講義テーマ
1	弘前市立第五中学校	1 月 8 日	角田 均	ソフトウェア情報学科	ネットワーク社会で「安全」に暮らす知恵
2	青森県立大学	1 月 9 日	崎谷 康文	学長	FD研修会　講演「学ぶことと教えること」
3	中央市民センター	1 月 9 日	菅 勝彦	社会学科	先人に学ぶ「年をとる技術」
4	黒石市立六郷公民館	1 月 19 日	大平 幸子	事務局長	豊な食卓を彩る調理実習
5	青森山田保育園	1 月 19 日	大平 幸子	事務局長	親子ケーキ作り
6	NPO 法人子どもネットワーク・すてっぷ	1 月 21 日	柏谷 至	社会学科	活動を事業化するための具体案の絞り込みとその準備について
7	中央市民センター	1 月 23 日	菅 勝彦	社会学科	先人に学ぶ「年をとる技術」
8	黒石市立六郷公民館	2 月 16 日	大平 幸子	事務局長	豊な食卓を彩る調理実習
9	青森県神社庁南黒支部	2 月 19 日	大平 幸子	事務局長	「第 37 回南黒敬神婦人の集い」における講演
10	青森障害者職業センター	3 月 1 日	船木 昭夫	社会福祉学科	ケーススタディ
11	青森県警察本部厚生課	4 月 22 日	藤林 正雄	社会福祉学科	傾聴を学ぶ
12	青森県生活協同組合連合会	4 月 25 日	佐藤 栄作	薬学科	高齢者とクスリについて
13	ライトサークル	4 月 20 日	徳光 幸子	薬学科	生活習慣病の予防と治療
14	オープンカレッジ市民大学	5 月 17 日	柏谷 至	社会学科	自然エネルギーの先進地・青森をめざして
15	オープンカレッジ市民大学	6 月 28 日	清川 繁人	薬学科	植物ポリフェノール

大学の行事（平成 25 年 1 月～6 月）

・2 月 15 日　　学術講演会
・3 月 7 日　　青森地域大学連携協議会
・3 月 15 日　　学位記授与式
・4 月 1 日　　学園全体会議
・4 月 2 日　　入学式
・4 月 25-26 日　企業セミナー
・6 月 22 日　　青森大学同窓会

[学位記授与式]

3 月 15 日、学位記授与式が挙行されました。学長が式辞において、「大学院が閉鎖になることは残念である。そして、青森短期大学が伝統の幕を閉じることは、大変無念である」と述べ、「青森大学が母校となるので、いつでも帰ってきてほしい」と呼びかけた。また、卒業生に対して、「学び続けること、そして、人とのふれあいやきずなを大切にして、置かれた場所で咲くこと」をはなむけの言葉とした。

[入学式]

平成 25 年度青森大学入学式を 4 月 2 日に正徳館で挙行し、新入生 220 名と編入学生 16 名、合計 236 名が入学しました。

式典では、崎谷康文学長が「青森から見上げる大空に、皆さんの夢と希望を大きく描いてください。初心を忘れず、充実した大学生活を送られるよう心から期待しています。生涯をかけて学び続ける力、人とつながる力、自分自身を見据え、確かめる力の三つの力を身に付けてほしい。」と式辞を述べました。

また、新入生を代表し、薬学部薬学科の今菜津美さん(青森東高校出身）が「社会に貢献できる人間になるよう、高度な専門知識と技術を身に付け、将来に対する理想を抱き続け、勉学に励みたいと思います。」と宣誓を行いました。

[学長補佐室の設置]

4 月 1 日、学長のリーダーシップによる全学的なマネジメントとガバナンスの体制を強化し、教育の改善等を総合的、体系的に進めるため、大学全体として横断的に考えるとき、学長の指示の下、各学部との意見調整を図りつつ、学長補佐とともに機動的な活動を行う組織として、学長補佐室を置いた。

[進むカリキュラム改革]

教養カリキュラム「青森大学基礎スタンダード」が 4 月からスタート

１.「基礎スタンダード」の特徴と魅力

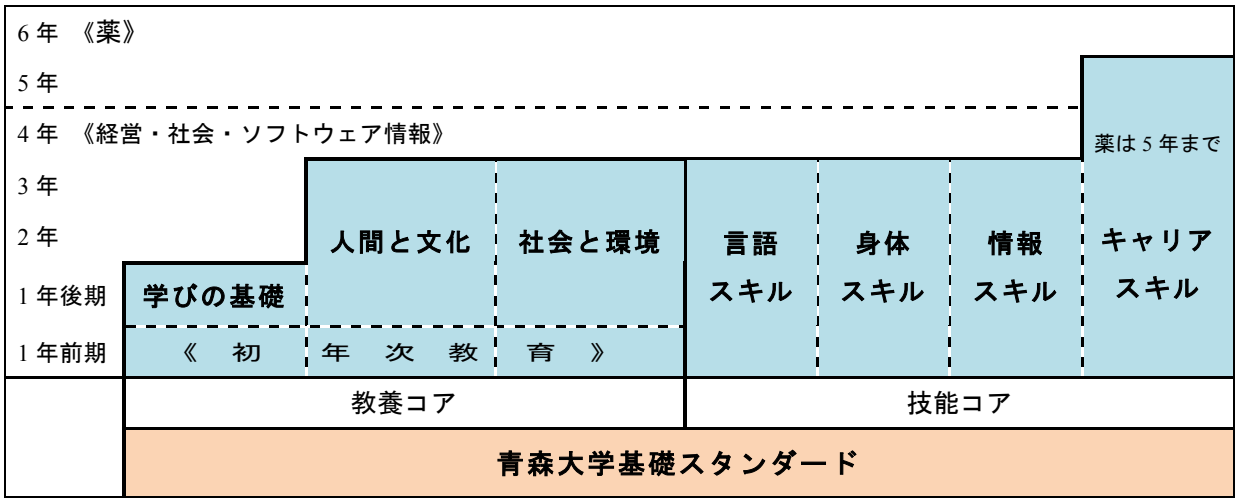
平成 25 年度 4 月からスタートした「基礎スタンダード」カリキュラムは、学生ひとり一人に能動的な学修を促しながら「確かな教養」と「実践スキル」を獲得させ、その後の専門教育へスムーズな移行を実現する新しい教育システムである。これは「青森大学ルネッサンス」の教育改革の主要な柱の一つで、平成 20 年 12 月の「学士課程の構築に向けて」の答申で示された、学士力の明確化、それを実現する教育課程の体系化、単位制度の実質化、教育方法の改善を具現化した結果でもある。従来の教養教育とは大きく異なる「基礎スタンダード」の主な魅力は以下のとおりである。

１）21 世紀をたくましく生きる人間力の保障

基礎スタンダードは、確かな教養を培う「教養コア」と、それを実践に活かす「技能コア」からなるダブルコア・カリキュラムである。

「教養コア」は 3 つの科目群に区分され、本学流の初年次教育となる「学びの基礎」、人類の学問的遺産を学ぶ「人間と文化」と「社会と環境」があり、中でも、入学と同時に始まる「学びの基礎」では、すべての学生が、高等学校までとは異なる大学生らしい学びのスキルの獲得をめざす。

「技能コア」は、これまで有能な実務者を社会に輩出してきた本学の教育内容を、教養教育カリキュラムとして 4 つの科目群として位置づけたもので、外国語の運用を学ぶ「言語スキル」、健康と運動にかかわる「身体スキル」、知識やデータの収集・分析・発表を支える「情報スキル」、学生の自己実現を支援する「キャリアスキル」からなる。



２）文系・理系の 4 学部の教員の協同による教育内容の精選

本学は北東北では唯一の総合大学であり、地域社会や時代のニーズに対応した一般教養のエッセンスを抽出して提供できる強みを持っている。「基礎スタンダード」の各科目の教育内容は、“Less is More.”をモットーに、４学部の教員間の連携によって「確かな教養」や真に役立つ「実践スキル」として精選され、学生時代はもとより将来においても学生の実践的能力を支えるものとなっている。

３）学生が主役になれる授業方法

基礎スタンダードの授業では、学生に予習・復習などの授業外学習を課しながらアクティブ・ラーニングを促す工夫がなされ、学生が自らの力で問題解決するために知識を蓄え、実践するスキルを磨く機会が用意されている。

また、4 学部の興味や関心の異なるさまざまな学生たちのグループ学習に協同学習の教育方法が取り入れられている。学生はグループのメンバーと授業の要点を整理・確認したり、問題解決に向けてプランを作成して実行したりして、思考力、分析力、表現力、行動力、コミュニケーション力を磨くことができる。

４）ユニークな総合科目「学問のすすめ」「人間と文化」「社会と環境」

「基礎スタンダード」には、初年次教育の役割を担う科目群が組み込まれている。その中でも「学問のすすめ」「人間と文化」「社会と環境」は、それぞれ十数名の教員グループが協同運営する本学の独自の総合科目である。

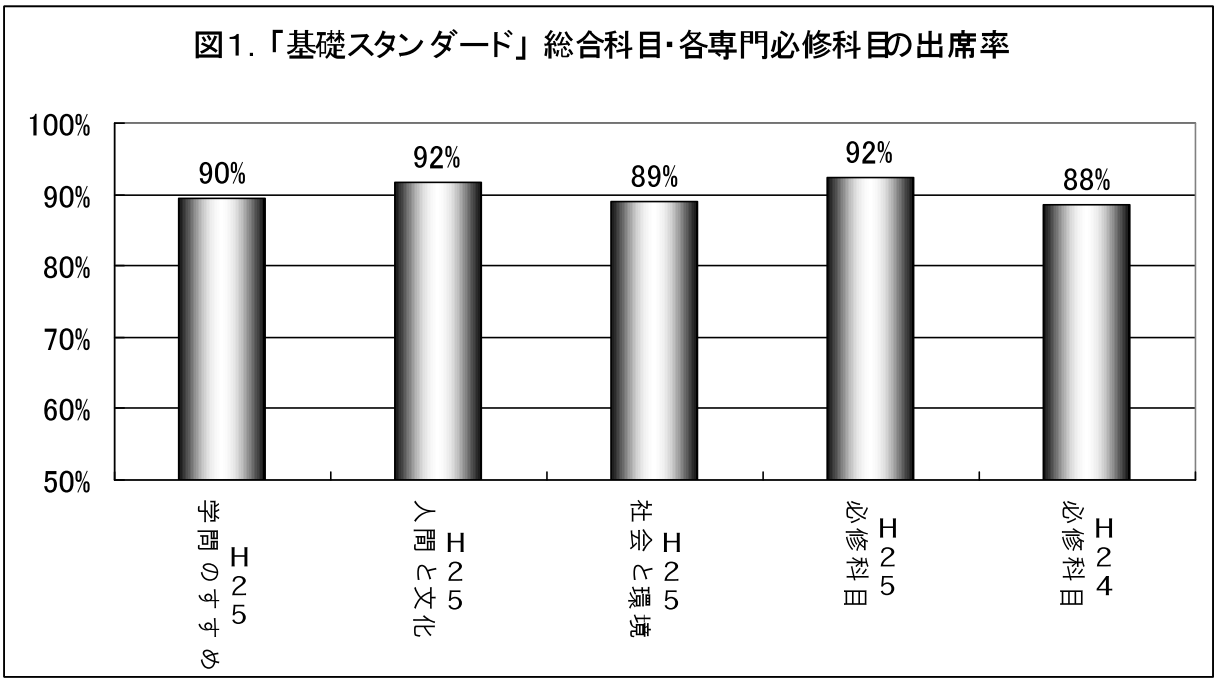
「学問のすすめ」では、学長を筆頭にさまざまな分野の専門家がそれぞれの学問の世界に誘い、授業外学習としてラーニング・ポートフォリオの作成を課して学びの基礎を養成している。また、「人間と文化」「社会と環境」では、現代なトピックを専門教員が交代で担当し、学生はグループ単位で授業外学習にとりくみ、プレゼンテーションを行い、自分たちの考えを文章化し、論理的に表現する力を獲得しできる。

２.「基礎スタンダード」の導入後の学生の変化

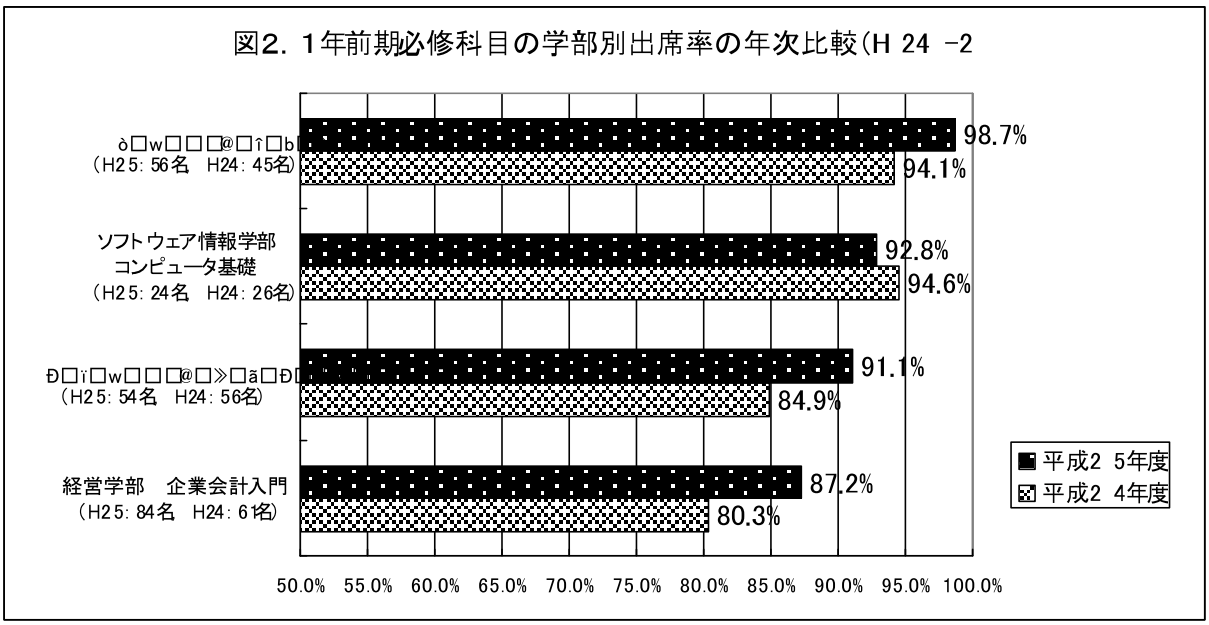
4 月に基礎スタンダードの各授業が開始されて約 3 ヶ月経過し、授業を担当する教員グループも受講する学生たちも落ち着きを見せてきている。このカリキュラムの導入の成果を検討するために、必修科目のうち中核となる総合科目について学生の出席率および達成状況を調査した。

総合科目 3 科目「学問のすすめ」「人間と文化」「社会と環境」出席率（4 月から 6 月末）を、昨年の各学部必修科目の出席率平均と比較してみると（図 1 参照）、本年度になって高まっていることがわか

る。「基礎スタンダード」科目だけでなく、専門必修科目にも良い効果が生まれていることは注目に値する。



また、専門必修科目で学部別の出席率の年次変化（図２参照）をみると、ソフトウェア情報学部が高い出席率を維持しているのを除いて向上しており、経営学部、社会学部、薬学部の出席率の上昇は顕著である。「基礎スタンダード」の導入によって学生の就学態度が望ましい方向に変化していることが示唆される。



３.「基礎スタンダード」科目における学習成果

「人間と文化」「社会と環境」の 2 科目において中間アンケート調査を行った結果（資料参照)、全体的には、学習効果があがっている事を示すデータであると考えられる。次ページの図は全体の総合

得点の分布である。全員が全項目に３（やや達成できた）と反応したとすると、平均点が 18 点となるが、ソフトがそれを上回っている。項目ごとの項目得点は、3 ページ目に示す。最も評価できる点は、項目１で「やや達成できた」と反応している学生が 102 名もいる。また、項目２と項目４の達成度が高いことも評価できる。しかし、項目６「課外学習」には改善の余地があり、今後の大きな課題の一つであると考えられる。（澁谷）

〈資料〉青森大学基礎スタンダード「人間と文化」及び「社会と環境」アンケート結果（部分）

1	授業の内容を理解することができた	1	2	3	4
2	社会の問題に関心を持つことができた	1	2	3	4
3	ノートを取りながら授業を受けることができた	1	2	3	4
4	グループワークに積極的に参加できた	1	2	3	4
5	授業中に発表・質問することができた	1	2	3	4
6	授業外学習を行うことができた	1	2	3	4

１：達成できなかった　２：あまり達成できなかった　３：やや達成できた　４：達成できた

経営学部

総合点	人数	平均点	標準偏差	最低	最高
Total	55	15.47273	3.681055	6	24

社会学部

総合点	人数	平均点	標準偏差	最低	最高
Total	44	17.38636	3.141736	8	24

ソフトウェア情報学部

総合点	人数	平均点	標準偏差	最低	最高
Total	23	18.26087	3.768499	9	24

薬学部

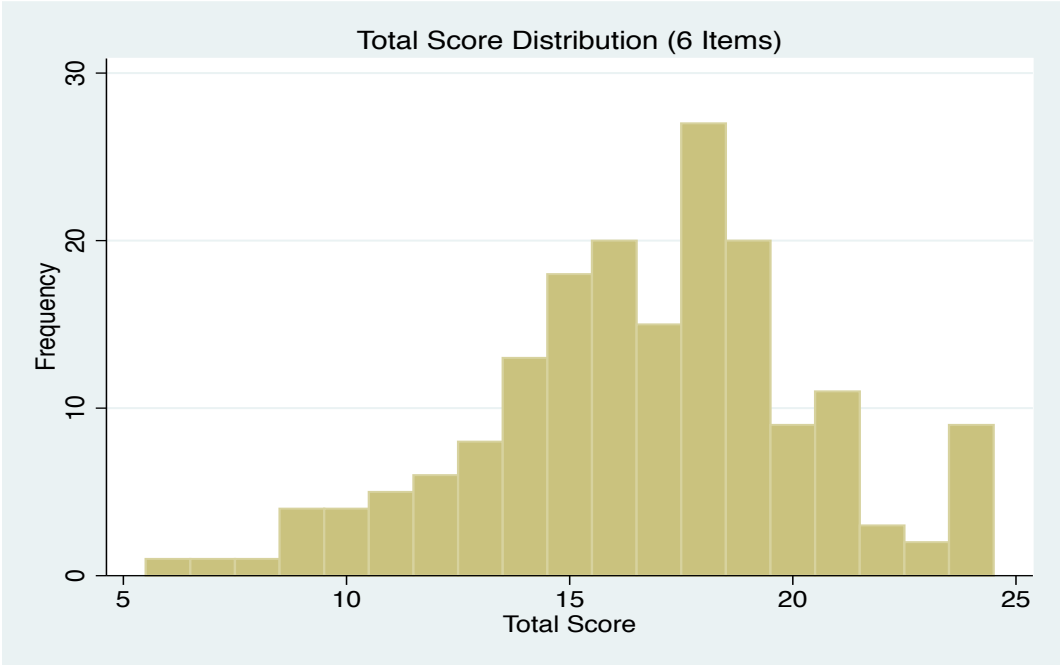
総合点	人数	平均点	標準偏差	最低	最高
Total	53	16.88679	3.656713	9	24

全学

総合点	人数	平均点	標準偏差	最低	最高

Total |	177	16.72316	3.661404	6	24

図３．全体の度数分布



[時事通信社発行の「内外教育」に「基礎スタンダード」が取りあげられました]

時事通信社発行の「内外教育」第 6249 号（5 月 28 日刊）に、2013 年度からスタートした全学共通の教養カリキュラム「基礎スタンダード」が取りあげられました。記事では、青森大学が、一歩先の未来を見据え、教育改革へ取り組んでいることに対する強い関心と大きな期待が示されています。

その一つが、基礎スタンダード導入からはじまる本学の教育改革の方向性への注目です。この紙面には、

> 社会、経営、ソフトウェア情報、薬学の 4 学部を横断する新たなカリキュラムを全学共通の「基礎スタンダード」として作成、その核心部分を 13 年度の新入生 220 人から必修化した。高校から大学へ、さらには教養課程から専門課程への移行をスムーズにし、大学として掲げる「生涯をかけて学び続ける力」「人とつながる力」「自分自身を見据え、確かめる力」を全学生に保障するのが狙い。

と、述べられており、基礎スタンダードですべての学生に確かな教養と実践スキルを保障して、専門課程の授業へスムーズに移行させ、卒業時までに将来を切り拓く力を育成しようという本学の意気込みが評価されています。

また、「教養コア」「技能コア」の 2 つの科目群からなる基礎スタンダードのカリキュラム構造と、そこに配置される科目の内容が紹介され、多数の担当教員の協同によって運営されていることが次のように取りあげられています。

> 最も特徴的なのが教養コアの 3 科目群のうち、初年次教育の重点の一環に位置づける「学問のすすめ」「人間と文化」「社会と環境」の 3 科目で、それぞれ各学部を横断する教員十数人が連携しつつ担当する。

さらに、学生が主体的に学ぶ基礎力を保障するために、本学が新たに導入した「共同学習」「アクティブ･ラーニング」などの新しい教育方法が注目されています。記事には、

> 学生側は入学時につくった 5 人グループ 10 組ほどが 1 クラスとなり、グループ単位で共同

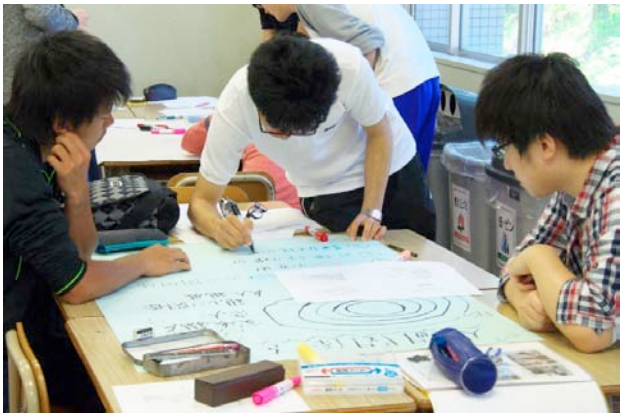
学習に臨む。学生が主役となって主体的に学ぶ「アクティブ･ラーニング」を前提に、それを大学側が最大限支援する取り組み

であると書かれています。これは、本学が実現をめざす大学生の学びの姿であり、学びの共同体づくりそのものです。

紙面には、基礎スタンダード導入の成果として、「出席率がいい。学生の『やりたい気持ち』を引き出すのにつながっている」という学長の話が載せられています。そして記事の最後では、

学士教育課程での「教員中心の授業科目の編成から組織的･体系的な教育課程への転換」を求める答申(中央教育審議会平成 24 年 8 月)をまとめたが、今回の試みはそれに対する一つの回答と言えるかもしれない。

とまとめられています。本学のカリキュラムと教育方法の改革は、基礎スタンダード導入により始まったばかりですが、今後の進展への大きな期待があることを痛感させる記事です。　文責　鈴木康弘

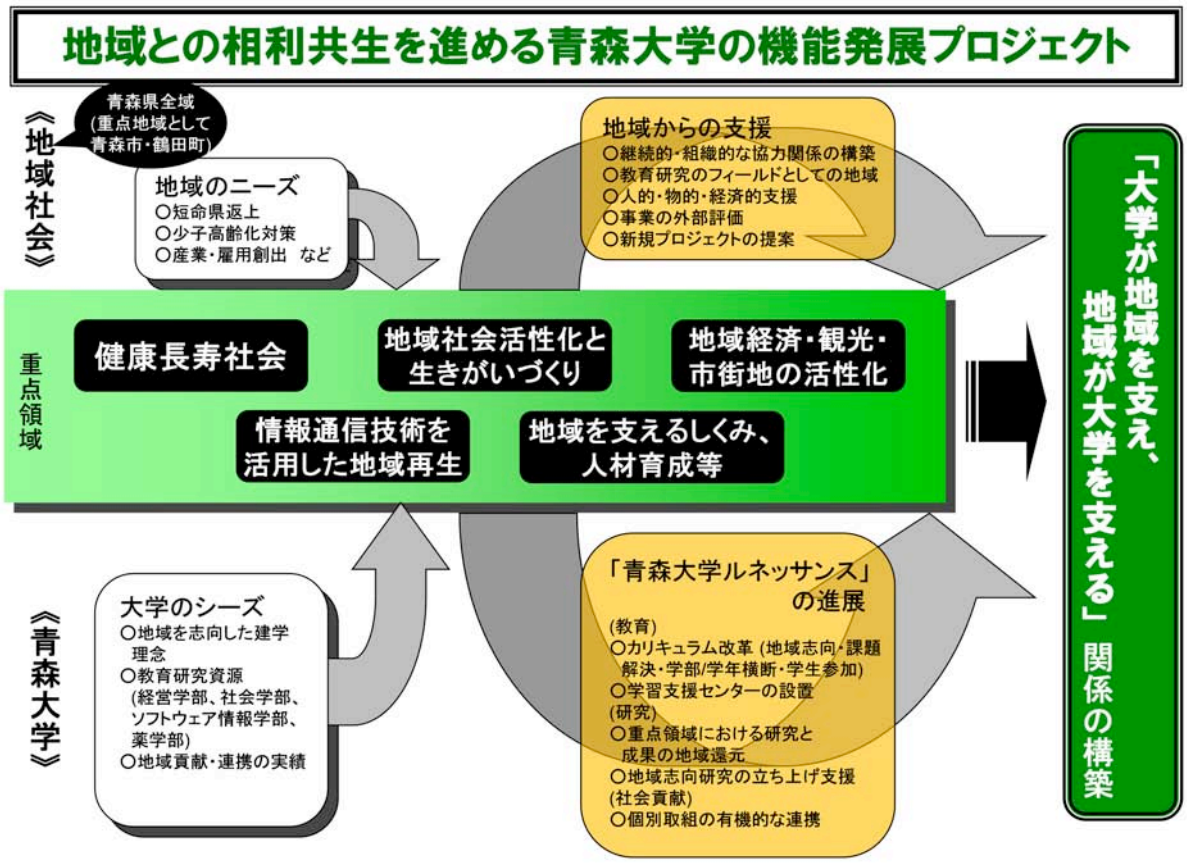


[文科省「地(知)の拠点整備事業」に応募]

平成 25 年 5 月 23 日、文部科学省が募集した平成 25 年度「地(知)の拠点整備事業」(大学 COC 事業)に、青森大学から応募しました。

大学 COC 事業とは、自治体と連携し全学的に地域を志向した教育・研究・社会貢献を進める大学を国が支援することで、課題解決に資する様々な人材や情報・技術が集まる、地域コミュニティの中核的存在 (Center of Community) としての大学の機能強化を図ることを目的とした国の事業です。平成 25 年度は全国から 50 大学程度が選ばれ、最長 5 年間にわたって国の支援を受けられるというものです。

本学では、青森県・青森市・鶴田町などとの連携による「地域との相利共生を進める青森大学の機能発展プロジェクト」を提案しました。「健康長寿社会」「地域社会の活性化と生きがいづくり」「地域経済・観光・市街地の活性化」「情報通信技術を活用した地域再生」「地域を支えるしくみ、人材育成など」の 5 つの重点領域を設定して、地域を志向した教育・研究・社会貢献活動を行っていく計画です。



[第 1 回学びの森市民セミナー開催]

5 月 25 日（土）に、第 1 回学びの森市民セミナーが本学記念ホールで開催されました。国立天文台の梶野敏貴先生を講師としてお招きし「宇宙のはじまりと生命の誕生」という演題でご講演をしていただきました。

地域貢献センター

[青森県教育委員会との連携協定を締結]

4 月 11 日、青森県教育委員会 (橋本都教育長) との間で連携協定を締結し、崎谷学長および各学部長ほかが出席して、青森県庁で締結式が行われた。

青森大学と青森県教育委員会は、これまでも、オープンカレッジにおいて縄文遺跡に関する講座の開催 (H.24 年 6 月)、情報教育高校などの生徒を対象とした情報技術の魅力を伝えるセミナーや講演の実施 (H.20 年度より) などを通じて、連携・協力を推進してきた。今回の連携協定締結を通じ、本学の人材や研究蓄積、施設や機能等を活用した、青森県の教育の充実・発展に寄与してゆきたい。

本連携協定に基づき、今年度は「薬剤師体験教室」および「高校生科学研究コンテスト」の開催、「科学の甲子園」青森県大会への運営協力などの事業を、県教委と連携して進める予定である。(柏谷)

青森県教育委員会と青森大学との連携に関する協定書

青森県教育委員会と青森大学は、次のとおり協定を締結する。

（目的）
第１条　この協定は、青森県教育委員会と青森大学が、密接な連携のもと、本県の学校教育、生涯学習及びスポーツ等の分野で相互に協力し、学校及び地域における教育の充実・発展に寄与することを目的とする。

（連携事項）
第２条　青森県教育委員会と青森大学は、前条の目的を達成するため、次の事項において連携し協力する。
（１）経営学、社会学、情報科学、薬学などに関する専門的な教育を活用した学校教育の充実及び調査研究に関すること。
（２）生涯学習・スポーツの振興に関すること。
（３）その他双方が必要と認める事項に関すること。
２　連携・協力事項の具体化を図るために必要がある場合は、特定の事項に関する検討組織を設置することができる。

（以下省略）

[「中高生の薬剤師体験セミナー」の参加者を募集開始]

青森大学と青森県教育委員会との連携事業のひとつとして、県内の中学生・高校生を対象とした薬剤師体験事業がある。

この事業は、薬学部の教育研究施設や人的ネットワークを活用した体験セミナーを開催することで、県内の中高校生に薬剤師の仕事に興味を持ってもらい、青森県の薬剤師不足の解消に役立てることを目的として行われるものである。県教育庁の担当者との打ち合わせの結果、セミナーの内容や実施日程、募集方法などが固まり、このほど参加者の募集が開始された。

セミナーは 8 月 31 日(土)、本学 5 号館で開催される。県内の中学校・高校から各 30 名を募集し、化学実験や調剤体験、現役薬剤師との座談会などを行う。本学は参加者の送迎、セミナー当日の準備及び運営、座談会に出席する現役薬剤師の手配を、県教委側は中学校・高校への連絡と参加者募集を、それぞれ分担することになる。

セミナーへの参加希望者は 7 月 23 日までに、各中学校・高校を通じて申し込むこととなっている。多数の中高生の参加を得てセミナーを成功させ、本学の特徴を活かした地域貢献活動として定着させてゆきたい。(柏谷)

[「幸畑プロジェクト」が始動]

大学が立地する幸畑地区の地域課題を、大学の人的・物的資源を活用して解決することを目指す「幸畑プロジェクト」が始動し、多面的な活動を開始している。

このプロジェクトは、社会学部の教員有志の発案で開始されたもので、造成から 50 年近くが経過しさまざまな地域課題が噴出している幸畑地区で、教員・学生と地域住民との交流を深め、多様な専攻をもつ総合大学としての特長を活かしながら、地域課題の解決を目指すものである。他学科の教員も含めた全学的な取り組みが必要なプロジェクトであることから、地域貢献センターが支援することとなった。

具体的な活動としては、大学としての地域貢献活動のほか、地域課題の調査 (青森学術文化振興財団の助成。研究代表：社会学部菅教授)、電子エコマネーを活用したボランティア活動の活性化に関する実証実験 (科研費助成。研究代表：石橋修・八戸学院大教授) が進行中である。文部科学省に申請中の「地 (知) の拠点整備事業」が採択されれば、防災や医療の啓発・調査研究を含めた「幸畑団地 (青森市) 再生」プロジェクト (5 カ年) も加わることになる。

既に社会学科 3 年生の菅ゼミ・櫛引ゼミが調査を実施し、結果の中間報告会を開催した (詳しくは本号の社会学部の記事を参照)。団地内の町会長などからもプロジェクトへの期待が寄せられており、多くの教職員・学生にも呼びかけて、幸畑地区に対する貢献を実のあるものにしたいと考えている。

本プロジェクトに関心をお持ちの方、幸畑地区での地域貢献・教育研究活動の構想をお持ちの方は、ぜひご連絡いただきたい。(柏谷)

[放課後「声と歌の教室」「ダンス教室」]

5 月より、地域住民や学生を対象にした「放課後声と歌の教室」、「放課後ダンス教室」がスタートした。本学の教職員と学生が地元の方々に健康増進と学びの場を提供することで、 学内外および住民相互の交流を深めることを目的とした活動である。

教室は毎週水・木曜日の午後 4 時半から午後 6 時まで、4 号館 3 階で開講されている。白岩貢准教授

（ソフトウェア情報学部）が、ダンスは社会学部 1 年の坂牛大希君らが指導役となり、演団「健康」(顧問・入試広報課 萱森) の団員らがサポートにあたっている。

今後は地域に呼びかけて参加者を増やすとともに、受講者が練習の成果を発表する機会も設けたいと考えている。(柏谷)

[青函圏交流・連携促進協議会]

6 月 10 日、青森グランドホテルで開催された青函圏交流・連携推進会議の平成 25 年度総会および情報交換会に、柏谷地域貢献センター長が出席した。

この会議は、さまざまな主体による交流・連携を通じて、青森と函館地域が一体となった経済文化圏を実現するために開催されているものである。H.24 年度の事業報告・決算や 25 年度の事業計画・予算を審議した総会と、青函圏の交流・連携に取り組んでいる団体・企業の事例報告が行われた。

1988 年の青函トンネル開通をきっかけに進んできた青函圏交流の活動も、新青森 - 新函館 (仮称) 間の新幹線開業を 3 年後に控え、新たな連携の試みが始まっているようである。青森・函館の共通性と違いをどう意識し、お互いにとってプラスとなる地域づくりに活かしていくか、事例報告と議論が行われた。(柏谷)

[民博との合同研究会を開催]

6 月 15 日、青森大学地域貢献センターと国立民族学博物館研究グループとの共同研究会が、本学第 5 会議室にて開催された。この研究会は、本学の「幸畑プロジェクト」に参加している教員と、国立民族学博物館の共同研究「人の移動と身分証明書」チームとが、「人の移動」を共通テーマとして合同で開催したものである。

共同研究チームのメンバーでもある社会学科・佐々木准教授の司会進行で、本学からは社会福祉学科の田中准教授が「移動するホームレスの現状」、社会学科の櫛引准教授が「青森県の限界集落に見る他出者の動きと内面」というテーマで報告した。国籍を越える移動や身分証明書を扱った民博側の研究者による発表と合わせ、人の移動や身分証明という研究分野の多様性や可能性が議論できた、興味深い研究会であった。

本学教員・学生にも多数参加していただき、教育研究のフィールドとしての青森の魅力が再認識するよい機会になったのではないかと思われる。(柏谷)

[リンクステーションとの共同研究に着手]

地域貢献センターが取り組む産学連携による共同研究として、(株)リンクステーションとの共同研究に着手した。

この共同研究は、同社と本学の教員有志 (ソフトウェア情報学科角田准教授・小久保准教授、社会学科 工藤教授・柏谷) とが、今年初めから検討を重ねで実現したものである。同社が開発中の非接触型 IC カード (Felica カード) システムとタブレット端末、クラウドシステムを組み合わせ、地域経済やまちづくりに貢献できるような活用法の提案を目指している。

今年度は、「“地域を遊ぶ”あおもりクエスト」と題し、学生を対象とした市内文化観光施設のスタンプラリーを、社会実験として実施する予定である。スタンプラリーのコース設定やアプリケーションの開発、カード保有者への情報提示、利用者の行動分析などを行って研究成果を上げるとともに、学

生の教育にも役立てたいと考えている。(柏谷)

[地域貢献センターのWebページを開設]

本学 Web サイトの中に、地域貢献センターの Web ページを開設した。本学の地域貢献活動の実績を紹介しているほか、主催・関連イベントの紹介やセンターの活動などを随時掲載し、内容を充実させていきたいと考えている。

地域貢献センターWeb ページの URL は以下の通り。本学 Web サイト左側のバナー画像をクリックして表示させることもできる。(柏谷)

http://www.aomori-u.ac.jp/community-collaboration/

大　学　院

報告：藤田　均・前大学院研究科長（現薬学部教授）

青森大学大学院環境科学研究科は 1999 年度開校以来 14 年であるが、2012 年度を最後に閉校することになっていた。

閉校に先立つ 2013 年 2 月 6 日（水）には大学院生 4 人の修論発表会が行われた。その研究テーマは「エネルギー整備問題」、「大学生の環境教育」、「東日本大震災廃棄物の処理問題」及び「地球温暖化に伴う降雪量の変化」という時代の要請に応えるものばかりであった。この中環境教育学専攻生 3 人のうち 2 人が修論、1 人が課題研究の発表であり、環境管理学専攻生 1 人は課題研究の発表である。4 人とも当発表会当日の審査及びその後の大学院教授会（2 月 21 日）での判定会審査をパスし、修了が認められている。これを受け、3 月 15 日（金）に行われた青森大学、青森短期大学卒業修了式にはそろって出席し、修了証書が授与されている。

なお、2012 年度の大学院生は 5 人であったが、残る 1 人は修論の提出という大学院修士号取得要件が整わず、その見通しも立た無い等の理由により退学となっている。

ここに大学院環境科学研究科は 3 月末日をもって閉校されたことを報告する。

[学術論文]

藤田　均：自然観察の切り口-新しい自然観察指導者教育法-青森大学・青森短期大学研究紀要 35 巻 3 号　2013　129-164

[地域活動]

藤田　均：委員として次の通り活動した。
　林野庁東北森林管理局・地域森林計画区及び国有林の地域別の森林計画検討会委員
　青森県・下北半島ニホンザル保護管理対策協議会委員、青森県公共事業再評価等審議委員会委員
　三沢市・仏沼保全活用協議会委員

藤　公晴：青森県・環境審議会委員

経　営　学　部

[国際交流活動：台湾研修旅行（平成 25 年 2 月 27 日から 3 月 6 日）]

義守大学交流会

本学の学生が海外研修によって、国際感覚を育み、日本と台湾の青年が語学研修や文化交流を通して相互の理解を深め、将来は両国の懸け橋に成れるように今回の台湾研修旅行を実施しました。現地の佛光大学(宜蘭)と義守大学(高雄)に訪問交流しました。義守大学では、入口から歓迎ムードで実際の授業に参加することができました。台湾佛光山寺の宿坊にお世話になり、華厳世界、美術館、佛陀記念館を見学しました。

また今年は台湾の新竹で開催されるランタンフェスティバルに青森市のねぶたが初参加の予定です。私と学生は青森県日華親善協会(会長山崎力国会議員)のグループに参加、有意義な親睦活動ができました。

（文責：江川静英　教授）

佛光山寺の不二山門

義守大学で授業参加

[日本商工会議所主催　簿記検定試験]

平成 25 年 2 月 24 日（日）に実施された第 133 回日本商工会議所検定試験において、2 級合格者 1 名（平成 24 年度通算 6 名）、3 級合格者 1 名（平成 24 年度通算 4 名）の 2 名（平成 24 年度 2 級、3 級合計通算 10 名）が見事合格した。過去 10 年間の中で最高の実績で終えることができた。

・2 級合格者：経 24063　村元美穂

・3 級合格者：経 23046　佐藤啓太

中でも 2 級合格者の 1 年生の村元美穂さんは 82 点の高得点で見事合格した。早くも 1 級の取得に向けての意気込みを見せていた。年度内での検定試験は今回を以て終了したことになる。平成 25 年度についても引き続き１0 人以上の合格者を目標としている。

近年一般学生が減少傾向にあり検定試験の成果を上げるには厳しい環境にあるが、今後大学理念に基づいた親身になっての個々の指導を徹底し、「簿記会計の青森大学」というイメージ・アップを少しずつでも広めていければと考えている。（文責：恵良二郎　准教授）

[簿記会計（2，3 級）補習授業の実施]

今回は 2 級受講者がなく、3 級受講者（経営学部 5 名、社会学部 2 名　合計 7 名）を対象に 5 月の第 3 週、第 4 週、第 5 週の火、木曜日の 16:20~17:20、及び 6 月の第 1 週の火、木曜日の 16:20~17:20 で通算 8 回実施した。日商簿記 3 級の商業簿記を中心とした個別問題と総合問題と予想問題を中心に行った。（文責：恵良二郎　准教授）

[経営学部スポーツ大会]

6 月 12 日(水)3.4 限目に掲題を開催。全 20 チームの参加を得、トーナメント方式のバレーボール競技を行った。入賞チームは 1 点を争う白熱したゲームが続き、どこが勝ってもおかしくない好ゲームを展開してくれた。予定された時間通りケガなく無事終了したことを報告します。

＊結果・順位　　優勝:田村ゼミ 2 年　　準優勝:田村ゼミ 1 年　　3 位:赤坂ゼミ

（優勝の田村ゼミ 2 年は報奨の商品券をユニセフに募金した）　　（文責：中田　吉光　准教授）

[学生活動]

平成 25 年５月　　環境学概論履修者 27 名が青森市上下水道部主催植樹活動に参加

（情報提供：田村早苗　教授）

[人物往来]

對馬晃教授が３月末退職されました。1991 年以来 22 年間の長きにわたりドイツ語教育に多大な貢献をされました。中田和一教授が、４月薬学部に転籍されました。森宏之青森短期大学教授が本学部に転入されました。吉川昌則准教授が教授に、石塚ゆかり講師が准教授に昇格されました。

（文責：戸塚茂雄）

[著書、論文、研究ノート、評論・書評、翻訳、寄稿、調査報告書など]

赤坂道俊　　平成 25 年 5 月 4 日「国際分業と経営戦略」『あおもり経済未知しるべ』〈50〉、『東奥日報』平成 25 年 5 月 4 日、朝刊。

平成 25 年 6 月 8 日「小売業二極化と経営革新」『あおもり経済未知しるべ』〈55〉、『東奥日報』平成 25 年 6 月 8 日、朝刊。

江川静英　　平成 25 年 3 月 23 日から 3 月 30 日まで中国文化の調査で、主に上海と蘇州に現地入り。授業の為の資料収集、中国古代服飾の原稿を書くための資料収集。

田村早苗　　平成 24 年度「緑の雇用」現場技能者育成対策事業の評価に関する調査報告書.全国森林組合連合会.（分担執筆）

恵良二郎　「天候デリバティブ取引とその実際」---実際的金融工学から---　青森大学・青森短期大学『研究紀要』第 35 巻第 3 号（通巻 115 号） p 49~72　2013 年 2 月

[学会報告、学会活動など]

恵良二郎　2013 年 5 月 31 日～6 月 1 日　日本貿易学会第 53 回全国大会及びシンポジウム「中小企業のグローバル展開と課題」（於大阪経済法科大学）

2013 年 6 月 15 日　日本簿記会計学会第 29 回関東部会「持分・資本概念の再検討」（於千葉商科大学）

沼田　郷　多国籍企業学会監事

[社会活動・地域貢献・講演など]　平成 25 年 1 月～6 月

赤坂道俊　平成 25 年 3 月 5 日　第七回青森地方最低賃金審議会、於：ラ・プラス青い森

平成 25 年 3 月 8 日　青森県独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構運営協議会（会長）於：青森県独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構青森職業訓練支援センター

平成 25 年 4 月 25 日　青森県地域連携型企業家創出事業実行委員会設立総会及び第一回実行委員会、於：青森県庁北棟５階 A 会議室

井上　隆　１月　(一財)青森地域社会研究所 客員研究員(～平成25年2月28日)

１月　あおもり県民政策ネット､政策ワーキング(第3回)､(一財)青森地域社会研究所(1/28)

１月　青森市都市整備部･青森市総合都市交通対策協議会(H24年度第4回)､会長、青森市福祉増進センター(1/30)

２月　青森市中心市街地活性化協議会運営委員会､副会長､青森商工会議所(2/7)

２月　あおもり県民政策ネットワーク､平成24年度･調査研究報告会 ならびに臨時総会、テーマ｢東日本大震災における八戸圏域企業の行動｣、八戸グランドホテル(2/9)
関連記事：｢災害対応 未策定企業も｣『デーリー東北』2013. 2.11.

２月　青森市中心市街地活性化協議会主催、青森市・青森商工会議所後援
｢中心商店街にぎわい創出事業調査研究成果報告会｣､指導参加､国際ホテル(2/13)
関連記事：｢商店街活性化へ大学生の報告会｣『東奥日報』2013.2.14、青森商工会議所『月刊 かけはし』(2013年2月号)等.

２月　RAB・ニュースレーダー‘新年度 青森県予算発表’コメンテーター(2/20)

２月　シンポジウム･コーディネータ、六戸町メイプルホール(2/25)
青森県高規格道路建設促進期成会・上北横断道路事業促進会議共催、
｢上北道路開通と地域を考えるシンポジウム～つなげよう人と人.そして未来へ～｣
関連記事：｢上北道路開通記念し シンポジウム｣『デーリー東北』2013.2.25.他

３月　あおもり県民政策ネット､政策ワーキング(第4回)､(一財)青森地域社会研究所(3/12)

３月　国土交通省 青森河川国道事務所主催､上北自動車道路･上北道路開通記念式典、来賓参加、於：東北町大浦地内･上北インターチェンジ(3/24)

３月　青森市都市整備部･青森市総合都市交通対策協議会(H24年度第5回)､会長、青森市福祉増進センター(3/27)

５月　青森県健康福祉部 青森県地域医療再生計画有識者会議 委員、国際ホテル(5/8)

５月　識者インタビュー：共著『東日本大震災における八戸圏域企業の行動』(あおもり県民政策ネットワーク･NPO法人ひろだいリサーチ 5/1 発行)によせて.
⇒｢震災時 企業の行動研究｣『東奥日報』2013.5.13.

６月　青森県民政策ネット・調査研究事業、知事への報告･懇談会、青森県庁知事室(6/13)
６月　NPO法人ひろだいリサーチ 理事会、青森グランドホテル(6/13)
６月　NPO法人ひろだいリサーチ 年次通常総会、弘前大学大学院地域社会研究科(6/15)
６月　財務省東北財務局 財務行政モニター会議、青森合同庁舎(6/17)
６月　青森市中心市街地活性化協議会、平成25年度総会、副会長、青森商工会議所(6/25)
H24年度事業報告･決算,H25年度事業計画･予算,役員改選(任期 25.4.1～27.3.31)等

江川静英　平成 25 年 3 月 11 日　青森明の星中学・高校の東日本大震災二周年追悼集会に参加。国際ソロプチミスト青森の会長として、共同祈願文を朗読

平成 25 年 4 月 27 日・28 日　第 27 回国際ソロプチミストアメリカ日本北リジョン大会にサポーティングクラブ会長として担当しました。北海道地域と東北六県の国際ソロプチミスト 800 余名の会員と受賞者の参加で開催されました。国際ソロプチミストは「女性と女児の生活向上」と「地域での社会奉仕」を目的に活動している団体です。本大会は、青森山田高等学校のブラスバンドの演奏、青森大学教授見城美枝子様の記念講演、会員親睦の宴には白岩貢氏のオペラ、青森大学のねぶた囃子など山田学園のご協力を得て、ソロプチミスト会員に喜ばれました。また青森県の観光や物産の使用と販売に多大な経済発展につなぎました。

田村早苗　１月　青森県内水面漁業管理委員会（青森市）
２月　青森県内水面漁業管理委員会（青森市）
青森市地球温暖化対策地域協議会青い森づくり推進 WG 会合（青森市）
農林水産省独立行政法人評価委員会林野分科会（東京）
３月　全国森林組合連合会「緑の雇用」評価調査委員会（東京）
農林水産省独立行政法人評価委員会林野分科会（東京）
林野庁入会林野中央コンサルタント会議（東京）
５月　青森県公共事業評価委員会（青森市）
６月　公益財団法人青森県建設技術センター評議員会（青森市）
一般財団法人日本森林林業振興会理事会（東京）
農林水産省独立行政法人評価委員会林野分科会（東京）
東北森林管理局 白神山地周辺の森林と人との共生活動に関する協議会（弘前市）
青森県公共事業評価委員会（青森市）

恵良二郎　平成 25 年 3 月 17 日（日）15:00~17:00　　青森県合気道連盟平成 24 年度総会
場所：青森市スポーツ会館第 1 会議室
議題：①合気道連盟役員選出、事業報告、収支実績及び予算案等
②弘前大学合気道部 50 周年武道大会について
③青森大学合気道部初参加・紹介について

平成 25 年 5 月 22 日（水）18:00~20:30　　青森アウガ男女共同参画委員
グループワーク活動・発表：「私の周りの男女共同参画今昔」
内容：男女社会の形成をめぐる動き、特に女性の社会進出と役割
参加団体・個人：NPO 法人、高校大学教員、事業主、自治会役員、主婦、会社員、公務員、PTA 役員等

平成 25 年 6 月 26 日 (水)　18:00~20:30　　青森アウガ男女共同参画委員

グループワーク活動・発表：「深読み」

内容：青森市男女共同参画プランの概要

計画の位置づけ、期間、理念と意識改革、行動改革、労働環境、

地域生活、男女平等と人権の尊重

参加団体・個人：NPO 法人、高校大学教員、事業主、自治会役員、主婦、会社員、

公務員、PTA 役員等

沼田　郷　平成25年3月　青森中央高校（出張模擬授業）

平成 25 年 4 月 27 日（土）ATV 青森テレビ「教えて知事」出演

平成 25 年 4 月 24 日（金）青森県 NIE 推進協議会総会　於：ホテル JAL シティ青森

平成 25 年 5 月 27 日（月）平成 25 年度第 1 回創業・起業推進会議於：ラ・プラス青い森

平成 25 年 6 月 3 日（月）夜店通り商店街との打ち合わせ

（於：夜店通り商店街組合事務所）

平成 25 年 6 月 4 日（火）核融合エネルギーに関する講演会　（於：青森グランドホテル）

東奥日報社　「ニュース力アップ」（隔週連載）

中田吉光　平成 25 年 1 月 26 日　新体操初の舞台「ＢＬＵＥ」をリンクステーションホール（青森市文化会館）において開催、2000 人の集客を得た。

平成 25 年 1 月 30 日　社会保険診療報酬支払基金青森支部において講演する。

平成 25 年 2 月 2～3 日　男子新体操全国合同合宿及び審判講習会東北会場（宮城：ホワイトキューブ）の主催者として 148 名の指導を行った。

平成 25 年 2 月 9～10 日　男子新体操全国合同合宿及び審判講習会関西会場（京都：花園大学）の主催者として 173 名の指導を行った。

平成 25 年 2 月 17 日　全国高等学校体育連盟体操専門部 兼同専門部 60 周年記念式典（第一ホテル両国）

平成 25 年 2 月 18 日　公益財団日本体操協会 全国代表者連絡会議 及び男子新体操技術・常任委員合同会議（国際フォーラム）

平成 25 年 2 月 28 日　福島市立荒井小学校演技会

平成 25 年 3 月 7 日　全日本学生体操連盟及び関東・東北北海道学生体操連盟役員総会（岸記念体育館）

平成 25 年 3 月 14 日　福島市立荒井小学校演技会の様子がＡＢＡテレビ「スーパーＪチャンネルａｂａ」で特集される。

平成 25 年 3 月 17～19 日　全国高等学校新体操選抜大会主任審判員（佐賀市）

平成 25 年 3 月 23～24 日　東北体操協会合同専門委員会議（八戸市）

平成 25 年 3 月 26～28 日 第 13 回全国体操小学生大会大会競技役員長（茨城県大洗町）

平成 25 年 5 月 22 日　フジテレビ「アゲるテレビ」の番組において『青森大学新体操部並びにシルク・ドュ・ソレイユで世界ツアー参加の卒業生』を紹介していただく。

平成 25 年 5 月 29～6 月 3 日　来る 7 月 18 日に三宅一生主催「青森大学男子新体操部」が国立代々木競技場第二体育館で開催される。その演出家 DanielEzralow（パリコレやソチオリンピック開会式演出）らが来青し、作品創り合宿を行った。

平成 25 年 5 月 13 日、6 月 10 日（月一回：計 6 回）　青森市立野内小学校クラブ活動（ダ

ンス）講師・実技指導（学生補助）を行った。

平成 25 年 6 月 14～16 日　第 11 回全日本新体操ユースチャンピオンシップ・第 4 回男子新体操団体選手権の主任審判員（東京体育館）

平成25年6月21～23日　東北高等学校総合体育大会審判員（盛岡アイスアリーナ）

社　会　学　部

社会学科・社会福祉学科

[平成 24 年度の学生研究発表大会]

1 月 22 日（火）、2012 年度社会学科・学生研究発表大会（主催・青森大学学術研究会）が、図書館新館 3 階の視聴覚室において開催された。同大会では、3 年生 1 報告、4 年生ゼミ論 6 報告、卒業論文 5 報告が行われ、その後、質疑応答が活発に行われた。

3 年生 (柏谷ゼミ) の報告は、太陽光発電を利用した事業計画案等を学生自身が立案し、地域に密着したエネルギー利用の可能性を提示したものである。4 年佐々木ゼミでは、ゼミ生各自が、自分で設定したテーマによるゼミ論を報告し、そのテーマは環境、労働、集団規範、ギャンブル、メディアの規制問題など、現代社会を反映した内容となった。卒業論文は、1 年間かけて深めた研究テーマに関した完成度の高い研究成果も発表されました。

12:40～17:00 という長時間の研究報告会でしたが、熱のこもった、非常に有意義な場となった。当日の発表者と発表テーマ等は、以下の通りである。

発表者：

3 年生（柏谷ゼミ）

・多出村和希・石岡郁也・中沢翔馬「地域に密着した再生可能エネルギーの可能性」

4 年生（佐々木ゼミ）

・西谷康希「青森県津軽地区の風力発電」

・佐藤貴範「SNS がテレビ離れにもたらす効果」

・石田俊栄「アニメ・ゲーム・マンガの表現方法と犯罪の関係」

・成田かおり「パチンコ業界の現状と課題～大衆娯楽としてのパチンコ～」

・田村健太「高校野球における規範について」

・淡路季樹「働くことを考える」

卒業論文

・小笠原隆「街コン」（柏谷ゼミ）

・風間直人「東日本大震災から見る自粛と自粛ムード」（柏谷ゼミ）

・阿保朝隆「子ども議会」（中田ゼミ）

・大芦圭央「迷走する奨学金制度」（中田ゼミ）

・中堤大介「ねぶた師の後継者問題～ねぶた師後継者のライフヒストリー調査～」（柏谷ゼミ）

司会：川村正貴・古川駿

コメンテーター：工藤雅世、中村和生、佐々木てる

[幸畑団地調査と町会長らへの中間報告会]

「幸畑プロジェクト」(本号の地域貢献センター記事を参照) の嚆矢として、社会学演習 III を履修する学生たちが 4 月から、住民との交流を兼ねた調査活動に携わっている。6 月 18 日には、町会長 5 人を授業に招いて「中間報告会」を実施した。空き家やごみ、雪などへの対策が課題として話題に上り、町会長・学生の双方から「さらなる交流が必要」という意見が出た。マス・メディアも取材に訪れ、学生たちの活動がテレビや新聞で報じられた。演習での取り組みは、(財)青森学術文化振興財団の助成による調査研究の一環であり、研究代表である菅勝彦学部長と櫛引が合同で約 25 人の学生を指導した。

学生たちはまず、新聞記事やテレビ番組を通じて、都市郊外型の団地が抱える「人口減少」「高齢化」などの問題に理解を深めた。そして 4 月 23 日、6 班が二手に分かれ、幸畑団地内でフィールドワークを行い、気付いたことや疑問に感じたことを記録した。

授業内のワークショップを通じて、団地が抱えていると考えられる課題と質問事項を整理した後、5 月 21 日には幸畑阿倍野市民館を訪れ、町会長に聞き取り調査を行った。学生たちは、この聞き取り調査で得られた膨大な情報を整理・分析し、論点や提言をまとめて、6 月 18 日の中間報告会に至った。青森大学との総合的な連携を検討中の青森市から企画調整課と市民協働推進課の職員、さらに幸畑地区を担当する青森市南地域包括支援センターの職員もオブザーバーとして出席した。

発表スタイルは特に指定しなかったが、学生たちはパワーポイントを活用して「学生による除雪ボランティアを組織してはどうか」「学生もごみの分別を徹底するよう、学内で告知するべきだ」「空き家対策として、学生向けのシェアハウス制度を整えてほしい」「幸畑団地のイベントに学生が出かけて、交流を深めたい」などと発表した。独自に幸畑団地の年代別人口推移を統計データから探し出し、グラフ化して発表した班もあるなど、2 カ月という短期間でまとめたことを考慮すれば、予想を上回る充実した内容と評価できた。町会長らの評価はおおむね好意的で、今後の具体的な対応を望む声も聞かれた。

中間報告会の開催を東奥日報、青森放送、青森ケーブルテレビ、NHK の 4 社に伝えたところ、全社が取材に来てくれた。NHK は今後の取材の予備調査となった模様だが、東奥日報は 6 月 22 日朝刊に記事を掲載したほか、青森放送も 18 日夕のニュースで、2 分弱にわたって放映した。青森ケーブルテレビも 22 日から 1 週間、ニュースをオンエアした。

もちろん、現時点ではまだ調査のスタートラインに立ったにすぎず、残りの 4 週間余りで、さまざまなテーマをより掘り下げてゼミ論にまとめ上げる必要がある。ゼミの活動としては、前期末に向けて、これからが正念場と言える。それでも、マス・メディアの記者を前に発表を実現できたことは、学生たちにとっても大きな自信となったに違いない。(櫛引素夫)

(下の写真は幸畑町会長を前に中間報告する社会学科３年生)

[青森大学　第 20 回寺山修司忌]

第 20 回寺山修司忌　5 月 22 日（水）、校歌歌碑前で開催される。

第１部　式典（黙祷、挨拶、献花、偲ぶことば、寺山作品の朗読、校歌斉唱）

第２部　特別記念トークイベント「高校生の寺山修司を語る」

学生、教職員、一般の方を含む約百人が参加。寺山没後 30 年、寺山修司忌第 20 回の記念の大会に相応しく、第２部では、若き日に文芸活動をともにした京武久美氏、藤巻健二氏、山形健次郎氏をお呼びして、「高校生の寺山修司」を語っていただきました。大変好評でした。今年は、司会日野千里（社会４年）、学生代表挨拶吉田彩香（社会１年）、寺山作品朗読佐藤翔太郎（社会３年）金城真麗乃（薬学２年）堀内友貴（薬学２年）村下直光（ソフトウェア情報学部（１年）と、学生たちが中心になり行われました。

[「寺山修司記念館フェスティバル 2013 春」(三沢市) に参加]

2013 年 5 月 4 日に行われた「修司忌」（寺山修司記念館）に、青森大学演劇団「健康」と文芸部「幸畑文学」の学生が参加。朗読詩劇、寺山修司へのオマージュ「懐かしのわが家」を熱演しました。

館長の佐々木英明、舞踏家福士正一さんとのコラボ劇は、みごとな出来でした。さっそく、次の出演依頼がきました。この催しの様子は、あっぷるワイド（ＮＨＫ）、ウイークエンド東北（ＮＨＫ）で放送されました。4 月 15 日～5 月 4 日の本番まで、連日の稽古。指導の佐々木英明館長に感謝。

出演者：海沼有紗　筒井志帆、柴田葵、吹田拓也、村下直光、吉田彩香

引率指導：久慈きみ代　萱森由介、鳴海香（卒業生）周宗瑾（卒業生）.

[社会調査士、新たに 8 名誕生]

一般社団法人社会調査協会の認定する社会調査士資格の認定結果が 6 月 1 日に公表され、本学からは社会学部の卒業生 8 名が新たに認定されました。この資格は社会学科で開講する所定の科目を履修することで、卒業後に社会調査士の資格を得るものです。これで本学出身の社会調査士は 45 名になりました。2004 年に制度を導入してから、毎年着実に認定者数を増加させています。今後の活躍が期待されます。

認定者一覧（2012 年度卒業生）

風間　直人　社会学部　社会学科

木村　勇貴　社会学部　社会学科
清水川拓也　社会学部　社会学科
千早　宙海　社会学部　社会学科
中堤　大介　社会学部　社会学科
西谷　康希　社会学部　社会学科
藤森　綱太　社会学部　社会学科
盛　かおり　社会学部　社会学科

[3 年生対象就職ガイダンス]

5 月 30 日(木)の 4 時間目に就職活動方法と題して 3 年生対象(社会学科と社会福祉学科)の就職ガイダンスを 350 教室にて実施しました。今回のガイダンスは 3 年生にとって実質的には第一回目の就職ガイダンスになりますが、3 年生のうちに準備をしっかり立てて、来たるべく就職活動に万全に備えるように指南しました。担当は、社会学科佐藤豊と櫛引素夫の二人で、加えてリクナビや毎ナビなどの登録も 3 年生は行いました。

[精神保健福祉援助現場実習]

現場実習は 27 日間であり、今年度は 12 名（3 年生 8 名、4 年生 4 名）の学生が実習予定である。すでに 4 年生の中には現場実習に入っている学生もいる。また、体験実習を修了した学生 3 名であり、現場実習に向けた準備を進めている。今年度の現場実習修了は 11 月の予定である。　(藤林正雄)

[社会福祉学科国家試験対策委員会より]

昨年度の国家試験合格者は下記のとおりであり、合格率が全国平均に及んでいない。また、介護福祉士登録学生は 3 名であった。

平成 24 年度	
社会福祉士	精神保健福祉士
15%(20 人中 3 人)	45.5%(11 人中 5 人)
全国平均 18.8%	全国平均 56.9%

今年度は、前期に 3・4 年生への毎月の学内模擬試験とその結果に基づく面接指導を予定している。

後期には、9 月に国家試験の受験を申し込み、10 月には、全国統一模擬試験を実施する予定である。加えて、9 月 2 日からの夏季集中補講、毎月の学内模擬試験、毎週のグループ学習を実施する予定である。　(藤林正雄)

[英語による映画制作]

今年度の 1 年生の英語Ｉ－4 組では、10 グループ（1 グループ 5 人）で、英語を使って映画制作に挑戦しています。この企画では、英語力だけでなく映像表現を駆使して学生の総合力を試すものですが、少しでも学生が自信をつけてもらうことができればということで始めました。課題は、グループによって協同作業に温度差がみられ、英文のシナリオ担当や編集担当に過度の負担がかかっていることがある一方で、映像表現では若者ならではの上手なグループも見られるものの、担当教員の技術指導不足もあり、表現力不足の映像もみられます。現在、学生と教員が悪戦苦闘しながら進めていますが、

上映会は、7 月 20 日(土)に記念ホールにて 12 時 30 分より実施します。（佐藤豊）

[新任教員紹介 ］

櫛引　素夫（くしびき・もとお）：社会学部社会学科准教授、1962 年、青森市生まれ、50 歳、東北大学理学部地理学科で気候学（ヤマセ）を研究しました。修士修了後、東奥日報社に入社し、編集畑を中心に 26 年間勤務。この間、弘前大学大学院地域社会研究科に 1 期生として入学し、「整備新幹線」の研究で博士号（学術）を取得しました。二足のわらじを履きつつ、在野の研究者として活動してきましたが、ご縁があり、４月から転進しました。研究者・教育者としては至って未熟な身ですので、ご指導のほど、よろしくお願い申し上げます。

木原　博（きはら・ひろし）：社会学部社会学科助教、1987 年 4 月 17 日 26 歳、早稲田大学スポーツ科学部に在学中は、スポーツ指導法や体育指導法などを学び、競走部（陸上競技部）にも所属しており、「走」の動作解析を研究テーマとし、研究しました。卒業後は早稲田大学本庄高等学院に体育の非常勤講師として３年間勤務し、今年の４月からご縁があり、転進しました。精一杯精進して参りますので、ご指導ご鞭撻のほど、宜しくお願い致します。

[学術論文・著書]

中村和生・柏谷至・渋谷泰秀・佐々木てる 2013 「「フレーム」概念の検討―環境配慮行動の分析にむけて―」 青森大学・青森短期大学研究紀要 35(3):73-94.

浦野茂・水川喜文・中村和生 2012「社会生活技能訓練における発話の共同産出 ――広汎性発達障害児への療育場面のエスノメソドロジー」三重県立看護大学紀要 16:1-10.

小久保温・澁谷泰秀・吉村治正・渡部諭 2013「Web社会調査のためのマルチ・デバイスに対応したユーザー・インターフェイスの設計」青森大学・青森短期大学研究紀要，35(3): pp.115-128.

[学会発表など]

澁谷泰秀・渡部諭「詐欺犯罪被害傾向と意思決定モード」認知心理学会高齢者心理研究部会第7回研究会，2013年3月2日，明治学園大学

小久保温・澁谷泰秀・吉村治正・渡部諭「社会調査のためのマルチデバイスWebアンケートシステムの開発」情報処理学会第75回全国大会，2013年3月7日，東北大学

渡部諭・澁谷泰秀「Taxometric分析による振り込め詐欺に対する高齢者の脆弱性の検討」日本認知心理学会第11回大会, 2013年6月30日，つくば国際会議場.

櫛引　素夫　「青森県の準限界集落にみる他出者の動きと内面」　青森大学地域貢献センター・国立民族学博物館共同研究会　「人の移動と地域を考える」2013 年 6 月 15 日、青森大学.

田中　志子　「移動するホームレスの現状」　青森大学地域貢献センター・国立民族学博物館共同研究会　「人の移動と地域を考える」2013 年 6 月 15 日、青森大学.

[報告書・書評・寄稿など]

野﨑　剛　「青森ねぶたと青森山田学園ねぶた　第 2 回―青森山田学園ねぶたの歴史（前編）―」青

森大学ホームページ〈ねぶたブログ〉（http://aomori-u.ac.jp/nebuta-blog/2013/03/2.html）に所収.

藤林　正雄・田中　志子・佐々木　てる「鶴田町心の健康調査報告書」鶴田町 2013.3.

澁谷泰秀・渡部諭 2013「高齢者犯罪を防止するための再帰属プログラムの開発・研究」公益財団法人三菱財団助成研究2011年度報告書，1－19 (2013).

渡部諭・澁谷泰秀「振り込め詐欺被害に遭いやすい高齢者の認知バイアスの研究－社会情動的選択性理論からの認知心理学的研究－」公益財団法人三井住友財団助成研究2012年度報告書，1－25（2013）.

[出張講義・講演など]

藤林　正雄　鶴田町「傾聴ボランティア養成講座 3 回シリーズ」講師(自殺対策),2 月 12 日,2 月 19 日, 2 月 26 日.

おいらせ町「ゲートキパー研修」講師（自殺対策）3 月 1 日.

自殺対策に係わり民間団体ネットワーク構築事業「いまこそ手を携えて青森県」コーディネーター,3 月 3 日，青森県.

青森県警本部「傾聴を学ぶ」生活安全課,4 月 22 日.

藤崎町「傾聴ボランティア講座（6 回シリーズ)」講師 5 月 31 日、6 月 7 日・11 日・18 日・28 日、7 月 12 日.

青森県社会福祉協議会「市民後見フォローアップ研修会『対人援助の基礎』」講師 6 月 24 日.

柏谷　至　「私達の活動･未来予想図ワークショップ」NPO法人子どもネットワーク・すてっぷ スタッフ研修会, 2013年1月22日 (昨年12月から行っていたワークショップの3回目), 五所川原市.

「参加と協働を通じた地域づくり～NPOに学ぶ活動活性化のヒント～」青森県選挙管理委員会「平成24年度市町村明るい選挙推進協議会組織・活動活性化研修会 (第1ブロック)」2013年3月5日，青森市.

「おおわにエコと交通町民フォーラム2013・バスで出かけてみませんか！～予約制バス“スネカラバス”のいままでとこれから～」コーディネーター，大鰐町エコと交通検討会「みんなで創るエコタウン推進事業」2013年3月9日，大鰐町.

「少年犯罪は“凶悪化している”か? ～社会調査はじめの一歩～」平成25年度第1回オープンキャンパス, 2013年5月18日，青森大学.

「少年犯罪は“凶悪化している”か? ～社会調査はじめの一歩～」青森中央高校大学見学会, 2013年6月27日，青森大学.

[地域活動]　(五十音順)

菅　勝彦　1 月 15 日　青森地方最低工賃（縫製）答申（審議会会長）

2 月 6 日　青森市議会「議員報酬に関する検討会」で講師（審議会会長）

2 月 9 日　第２期青森県医療費適正化計画を承認（懇話会委員）

2 月 20 日　青森市議の報酬削減問題をめぐり ABA 出演

3 月 5 日　青森地方最低賃金審議会（会長）

3 月 12 日　日本自動車連盟青森支部交通安全実行委員会（会長）

3 月 18 日　青森地方労働審議会（会長）

3 月 22 日　青森操車場跡地利用計画を答申（審議会会長）

藤林　正雄　NPO法人あおもりいのちの電話研修委員長 (毎月委員会を開催、相談員養成の実施、相談員の継続研修等を運営)、
青森県運営適正化委員会委員 (苦情解決部会委員として2ヶ月に1回参加)、
青森県精神医療審査会委員 (2ヶ月に1回の審査会に参加及び退院請求に伴う意見聴取)、
青森県精神保健福祉士協会理事 (選挙管理員長3月末まで)、
青森県福祉サービス第三者評価推進員会員及び青森県社会福祉協議会福祉サービス第三者評価調査者として調査を実施。
地域密着型サービス外部評価審査会審査委員、
つがる西北五広域連合地域自立支援協議会委員、社会福祉法人「花」評議員・理事。

柏谷　至　特定非営利活動法人グリーンエネルギー青森 副理事長 (2002年より)。特定非営利活動法人アニマルサポート青森 監事 (2004年より)。大鰐町地域公共交通会議 委員 (2009年より)。鹿角市新エネルギー利活用促進協議会 委員、一般社団法人グリーンエネルギー鰺ヶ沢 理事 (2011年より)。青森県明るい選挙推進協議会 委員、弘前大学北日本新エネルギー研究所「地中熱利用普及拡大委員会」委員 (2012年より)。株式会社グリーンエネルギー浮田 代表取締役 (鰺ヶ沢町における風力発電事業を実施するために設立された、NPO法人グリーンエネルギー青森の100%子会社。2013年1月より)。青森県新産業創造課「イノベーション・ネットワークあおもり」タスクフォース・メンバー (2013年4月より)。

ソフトウェア情報学部

[第1回学びの森市民セミナー開催]　（堀端 孝俊）

平成25年5月25日（土）に、第1回学びの森市民セミナーが本学記念ホールで開催されました。国立天文台の梶野敏貴先生を講師としてお招きし「宇宙のはじまりと生命の誕生」という演題でご講演をしていただきました。

青森大学と青森明の星短期大学は、両校の学生の交流を中心とした「ゆるい連携」について検討を重ねてきました。その結果、春と秋の２回、相互のキャンパスでセミナーを開催し、同時に地域の皆さまの生涯教育にもお役に立てることを考え、この「学びの森市民セミナー」を企画しました。当日は、本学と青森明の星短期大学の学生はもちろんのこと、県内の大学生、高校生、地域の方々など200名を超える来場者を迎え、熱のこもった講演を聞く事ができました。崎谷康文青森大学学長のご挨拶の後、青森明の星短期大学の辻昭子学長が、旧約聖書に 「光あれ」 として記されている天地創造に思いを馳せながら今日のお話に期待してます、とのご挨拶があり、その後、思いもかけず梶野先生が天地創造から講演を始められたので、会場の空気が一気に盛り上がり次々と話題が展開して行きました。

今回の講演は、ふだん物理学とは縁遠い学生達にも強い印象を与えたようでした。学生たちの感想文からいくつかを紹介します。

・なぜ、宇宙は進化し成長できたのかは自発的対称性の破れが原因であると知りました。対称性の破れは静的ではなく動的に起こるということを先生は体格の異なる力士同士の取組みを例に使って説明してくださったので分かりやすかったです（薬学部1年生）

・宇宙の起源がビッグバンであるということは知っていたが、それが旧約聖書の冒頭の記述に近いこと、重力とそれ以外の力を統一するには10次元が必要なこと、そして10次元の力の起源を突き止めれば多宇宙が見つかるかもしれないということにはとても驚きました（ソフトウェア情報学部2年生）
・E=mc2という式は、アインシュタインが特殊相対性理論の帰結として発表したということを初めて知った。宇宙が膨張しすぎてこの先どうなっていくのかがとても気になった。最後の、生命の起源がとても難しかった。アミノ酸やニュートリノが左巻きだけだということには驚いた（経営学部3年生）
・宇宙の加速度的膨張の謎に関して、質量間に引力しか働かず引力は膨張を止めようとする作用があるのになぜ宇宙は加速度膨張するのかがまだ不明であり、研究がつづいていることに興味を持ちました（ソフトウェア情報学部3年生）

聴講した学生たちの反応はおおむね良好で、今回の講演会は彼らに強い印象を与えたようです。２回目は10月26日（土）に青森明の星短期大学で開催し、本学薬学部の斉藤俊昭先生がクスリをテーマに講演をすることになっています。

[人事往来]

昇格： 角田 均　教授（准教授から）
　　 和島 茂　准教授（講師から）

[平成24年度卒業研究発表会]

卒業研究発表会が、2月13日（水）9:30～14:30に本学5号館5102教室で実施された。発表は12研究室に所属して、情報システム、ＣＧ・マルチメディア、ロボット・組込みシステムの各々の分野で取り組できた21のテーマについて実演を交えながら行われた。この発表に対して、学生、教員から多くの質問が出され活発な質疑応答が行われた。

[船越君が基本情報技術者試験に合格]　（李 孝烈）

本学部3年生の船越貴裕君が、平成25年4月21日に実施された基本情報技術者試験に合格した。学科の資格取得対策のための科目である「ソフトウェア情報学特講」を2年次に受講し、優秀な成績であった。今回の受験者数は46,416名であり、合格率は23.0%という難関を見事に突破した。

[リンクステーションとの産学連携プロジェクト]　（小久保 温、角田 均、工藤 雅世(社会学部)、柏谷 至(社会学部)）

青森市内に本社を置くIT企業である株式会社リンクステーションとの間で産学協同による地域連携プロジェクト実施の検討を始めている。学内有志の教員とリンクステーション担当者による打合せを2月から開始し、FeliCaサービスを活用した大学での課外活動サポートシステムの構築と、それを活用した大学生による地域の社会見学講義のプランをまとめ、今年度後期の実施を目指して準備を進めている。

[青森商業高校課題研究発表会]　（小久保 温、角田 均、新内 豪、竹内 裕美子）

青森大学と青森商業高校の高大連携の取り組みとして進めてきた、情報処理科の3年生による3DCGコンテンツ制作の研究成果発表会が2月15日に青森商業高校で開催された。高校生のグループが、青森大学ソフトウェア情報学部の学生による指導のもとで、自分たちの学校の校舎を3次元CGで再現した1年間の課題研究の取り組みを発表した。発表会には大学からも指導役の学生3名が参加し、高校生の成果についての講評や、大学で自分たちが取り組んでいる研究の紹介を行った。

[尾駮小学校環境ブラウザの展示]　（角田 均、小山 智也、三上 一(元青森環境管理事務所)）

ソフトウェア情報学部で開発した青森県全域の3次元地理情報システムである「デジタル青森」を活用した研究として、河川や湖沼の水質データを可視化する研究に取り組んでいる。今回は六ヶ所村立尾駮小学校の協力を得て、小学生の自然観察の記録を水質のデータとともに可視化し、生徒自身が自分たちの観測データを3次元地図上で俯瞰できるシステムを構築した。2月22日から3月4日の期間に尾駮小学校に展示、公開し、生徒に自由に操作してもらい、システムについてのアンケート調査を実施した。また教員や保護者からも意見をもらい、今年度の開発に反映させている。

[県内情報関連企業と県内大学との連携による出前研修]　（小久保 温）

平成24年度青森県情報産業人財育成連携事業を青森県情報サービス産業協会が受託し、青森大学については以下の通り実施した。

・青森県内情報関連企業見学会　平成24年12月13日(木)

青森大学ソフトウェア情報学部3年生が、青森市内のIT企業である青森電子計算センター、NECソフトウェア東北を見学。IT企業で働くというのはどういうことなのか、県内IT企業の業務内容と求める人材などを学生たちは学んだ。

・県内情報関連企業と県内大学との連携による出前研修

富士通システムズ・イースト米田剛氏を講師とし、青森大学ソフトウェア情報学部3年生が、ワークショップ形式でオープンデータを活用した地域ビジネスのモデルを考える研修を実施した。これからの社会の動向と新しい働き方、オープンデータというムーブメント、ビジネスの視点で地域と技術を考えることなどを学生たちは学んだ。

平成24年12月18日(火)2、3限　テーマの提示、全体ディスカッション

平成25年1月15日(火)2限　レビュー

平成25年1月29日(火)2限　発表会

[青森県オープンデータ活用推進フォーラム]　（小久保 温）

平成25年2月8日(金)に青森県オープンデータ活用推進フォーラムが開催された。平成24年度青森県情報産業人財育成連携事業の青森大学における実施内容を小久保温が紹介した。フォーラムの講演者であるオープンデータの研究者たちから、大学でオープンデータの活用に関する講座を実施したのは、日本では青森大学がはじめてだろうというコメントをいただいた。そして、2月23日に開催されるInternational Open Data Dayへ青森から参加してはどうかということになった。

[International Open Data Day in AOMORI]　（小久保 温）

平成25年2月23日(土)に、オープンデータを市民が活用する世界同時イベントInternational Open Data Dayが開催され、日本からは8都市、青森からは青森大学を会場に参加した。参加者は17名。青森大学ソフトウェア情報学部の学生たちと、青森県内IT企業の技術者、官公庁関係者など。平成24年度青森県情報産業人財育成連携事業で学生たちが考えたオープンデータを活用した地域ビジネスのモデルを、社会人を交えてより深く検討した。また、青森県におけるオープンデータの利活用に向けた行政、教育、企業からの視点を交えた検討を行った。

[オープンデータ流通推進コンソーシアム表彰式]　（小久保 温）

平成25年3月18日(月)にオープンデータ流通推進コンソーシアムの表彰式があり、International Open Data Dayの取り組みが「優秀賞」「日本IBM賞」を受賞した。

[青森県情報産業人財養成連携に向けた情報交換会]　（小久保 温、遠藤 嵩大、小山 智也）

平成25年3月26日(火)に、青森県情報産業人財養成連携に向けた情報交換会が開催され、平成24年度青森県情報産業人財育成連携事業について小久保温、学生(当時3年生)の遠藤嵩大・小山智也が発表した。この発表については、ディスカッションが大変盛り上がり、参加者の興味をひいた。

[「ペリグーの街角」立体絵画完成披露・報告会]　（小久保 温、和島 茂、三浦 元太郎）

平成25年3月28日(木)に、青森県視覚障害者情報センターにて、「ペリグーの街角」立体絵画完成披露・報告会が開催された。「ペリグーの街角」は、青森市在住の油彩画家・小林麗氏が、視覚障害者に楽しんでもらおうと、青森県視覚障害者情報センターに寄贈した油彩画である。また、これまで、青森大学は青森県立美術館や青森県障害福祉課と連携し、視覚障害者が絵画を楽しめるように立体化する「触れる絵画」の研究に取り組んで来た。そして、今回、「ペリグーの街角」を立体化することで、視覚障害者の方たちに、より楽しんでもらうことができると考え、青森県立美術館より平成24年度「ペリグーの街角」立体教材制作業務が青森大学に委託された。本完成披露・報告会では、これまで「触れる絵画」の研究に取り組んできた小久保温や、「ペリグーの街角」の立体化に取り組んだ三浦元太郎(当時3年生)や指導を行った和島茂らが、作品について紹介した。この様子は東奥日報(3月29日朝刊)や陸奥新報(3月29日朝刊)、青森県内のTV番組などで取り上げられ、青森県庁広報番組「あおもり県庁なう」(3月29日)でも小久保温が出演し紹介された。

[CSS Niteベスト・セッション2012]　（小久保 温）

平成24年4月行った以下の講演がCSS Niteベスト・セッション2012のベスト20セッションに選出された。小久保温、「すばやく小さくはじめられるHTML5×CSS3×JavaScriptで青森のコンテンツをつくる」、CSS Nite in AOMORI, Vol.6 with Microsoft、アスパム、2012年4月28日

[ながれやまオープンガーデン2013散策支援スマートフォンアプリ]　（小久保 温）

千葉県流山市で平成25年5月26日(日)-28日(火)に開催されたイベント「ながれやまオープンガーデン2013」の散策を支援するスマートフォン用Webアプリを公開した。「ながれやまオープンガーデン

2013」は、「ながれやまガーデニングクラブ花恋人(カレント)」主催、流山市後援のオープンガーデンイベントである。オープンガーデンとは、英国発祥で、個人の庭を一定期間公開するイベントである。このアプリは、青森大学ソフトウェア情報学部と江戸川大学社会学部現代社会学科の散策型地域観光を支援する共同研究により開発された。

[第4回モノマチ・スマートフォン版イベントマップ]　（小久保 温）

平成25年5月24日(金)-26日(日)に東京都台東区を中心に開催された「モノづくりのマチ」をテーマにしたイベント「モノマチ」のスマートフォン版イベントマップを公開した。ながれやまオープンガーデン2013のスマートフォンアプリと同様、青森大学ソフトウェア情報学部と江戸川大学社会学部現代社会学科の散策型地域観光を支援する共同研究により開発された。

[OctPhotoVR講習]　（小久保 温、角田 均、和島 茂）

平成25年3月19日(火)に、黒石商業高校の2年生を対象として、青森大学で開発したOctPhotoVRシステムによるVRパノラマコンテンツの制作実習を実施した。主に当該研究室の3年生が講師を担当し、VRパノラマコンテンツに使用するパノラマ画像の制作方法などについて指導した。

[青森商業高校課題研究]（小久保 温、角田 均）

青森県高等学校教育研究会商業部会と県内6大学の高大連携の取り組みの一環として、青森商業高校情報処理科の3年生8名による課題研究をソフトウェア情報学部との共同研究の形で進めている。今年度は学内で開発したWeb上で仮想的な3次元ウォークスルーを可能とするOctPhotoVRを用いて、青森商業高校の校舎をコンテンツとして作成している。前期に大学側で実施した4回の講義ではソフトウェア情報学部3、4年生の学生がサポートを行い、県内の商業高校の研究発表大会に向けてコンテンツ作成に取り組んでいる。

[活動報告]

[第8回歩いて楽しむ小春通り祭] ～白岩 貢ミニコンサート～

2013年2月8日(日本原燃サイクル情報センター)

[歌で綴る名曲の旅] ～岡村喬生先生をお迎えして～

（白岩 貢）

2013年2月24日（県民福祉プラザ県民ホール）

[レクチャーコンサート・イン・シュトラウス]　～モーツァルトのひとときを友田恭子氏と～

（白岩 貢）

2013年3月22日（シュトラウス）

[第27回国際ソロプチミストアメリカ日本北リジョン大会] ～前夜祭オープニングコンサート～

（白岩 貢）

2013年4月26日(ホテル青森)

[ピアノソロとリートを愉しむ] ～田中明美＆吉田信子＆白岩貢ジョイントコンサート～

（白岩 貢）

2013年5月11日（土）（青森公立大学国際交流ハウス）

[学会発表]

角田均、三上一(元青森環境管理事務所)「情報技術の活用による自然学習の高度化と継続的な環境教育のしくみづくり」第47回日本水環境学会年会(大阪工業大学、3/11-13)

和島茂、角田均「斜め写真からの大規模構造抽出」本写真測量学会平成25年度年次学術講演会(東京大学生産技術研究所5/20-21)

佐々木一成(当時4年生)、小久保温「OctPhotoVRによる三内丸山遺跡のVRコンテンツ」平成24年度第4回芸術科学会東北支部研究会、日本大学工学部、2013年3月28日

小久保温、澁谷泰秀、吉村治正(奈良大学)、渡部諭(秋田県立大学)「社会調査のためのマルチデバイスWebアンケートシステムの開発」情報処理学会第75回全国大会、東北大学、2013年3月7日

[論文]

小久保温、澁谷泰秀、吉村治正(奈良大学)、渡部諭(秋田県立大学)「Web社会調査のためのマルチ・デバイスに対応したユーザー・インターフェイスの設計」青森大学・青森短期大学研究紀要、第35巻第3号pp.115-128、2013年2月1日

薬　学　部

[薬学部から]　（薬学部長　熊﨑　隆）

薬学部長に就任して 2 年目を迎えています。4 月には学外から 3 名、学内から 3 名の教員を迎えました。新しく赴任された教員の皆様が、これまでの経歴を生かして、活躍されていることに感謝しています。さて、現在の薬学部における課題は山積しておりますが、なかでも入学者の確保、低学年における基礎学力の向上はもっとも重視すべき事柄です。昨年度、文科省主催の検討会「質の高い入学者の確保に向けてのフォローアップ」から「今後改善すべき事項」としていくつかの指摘を受けましたが、それに対する回答については 5 月末に報告書を提出しております。ここでは、現在までに講じた策についての途中経過などについて記載しておきます。

まず、入学前教育のより一層の充実を目指して、新たに東進ハイスクールの「入学前準備教育」を採用し、すでに推薦入学・AO 入学試験合格者を対象に実施しました。最初の年度であり、必修科目（「数学基礎」「国語」）学部負担)、選択科目（「物理」、一部「化学」自己負担）の選定に苦慮しましたが、東進側の報告書に記載された受講生の感想を参考にすれば、概ね、実施して良かったと判断しております。しかし、「数学基礎」については、講習内容が基本的事項の復習であったにも関わらず、受講前後で成績の上昇がほとんど見られないという結果を得ています。この点は東進側も認めており、次年度の科目選定の判断材料にしたいと考えています。

次に、入学者に対する基礎学力向上策の一環として、まず今年度早々に「基礎学力向上委員会」を学部内に立ち上げて今後の方針を決めました。今年度入学生に対しては 4 月の講義開始時に全員に数学、化学、英語の 3 科目についてのプレイスメントテストを初めて実施しました。テストの結果は今

後 6 年間の成績の追跡調査に活用できます。ここで、英語は従来通りの実施で能力別クラス編成のための資料とし、数学と化学の成績については、補講対象者選定の材料としました。結果として、どちらも 15 名程度の要補講対象者が選定されました。化学基礎と数学基礎の補講は 5 時限目を使って現在まで 9 回ほど実施しました。数学基礎について言えば、30 分間の小テスト、採点、解説を行っています。現時点における暫定的な結論は、学生側の感想を聞いてみないとはっきりしませんが、やって良かったということでしょう。今後の課題は一定レベルの基礎学力を持った入学生の確保ということですが、今回の補習講義の経験は、入試における科目設定の見直しにも有効利用できると考えています。

最後に、同じく文科省の検討会から指摘されて変更した点について書いておきます。卒業研究を充実させるための第一歩として、今年度の研究室配属時期をほぼ 1 ヵ年近く早めて 4 年次進級早々の 5 月としました。これにより、薬学生の半数が研究室に配属されることになりました。実験室を持たない教員数名に対しても人数は多くないものの学生が配属されます。これに付随する問題が 4～6 年次配属学生のための実習室・自習室の確保であることは明らかです。本学 5 号館の薬学部実験研究室・研究室については、学生の勉強及び卒業実習のためにできうる限り、整備すべきであると考え必要な要請等を行っていく積もりです。小さくはあっても一つ一つの課題を解決するには、皆様のご協力が必要です。どうぞよろしくお願いいたします。

[地域活動など]

中田：あおもり ITS 推進研究会，第 2 回（1 月 25 日）および第 3 回（3 月 26 日），会長，青森市福祉増進センター

天内：6 月 21 日　青森中央高等学校において、今年度の高大連携に関する打ち合わせを行った。

[報告論文]

葛西，中田：積雪寒冷地における防災 ITS の取り組み，交通工学，平成 25 年 1 月号，Vol48，No.1，丸善出版，p32-35

青 森 短 期 大 学

[平成 24 年度の学生研究発表大会]　2013 年 2 月 13 日 8：50～　　報告者：森　宏之

最後の学生研究発表大会が開催された。今年度も各コースおよび専攻の代表者が研究の成果を発表しました。

詳細は、下記のとおりです。

司会：中村愛里　　進行：三浦穂乃佳

発表者	所属	担当教員	発表テーマ
成田 有花	情報コース	宍戸　聡純	「広がるネット社会における危険」
高谷 美紗子	ライブラリーコース	野﨑　剛	「佐藤米次郎の豆本出版について」
天内 美沙	スポーツコース	中田　吉光	「現代スポーツのあり方ースポーツ体感型ゲームの需要と生活習慣」
福士 健輔	子ども専攻	上村　久美子	「子どもの交通安全ーＪＡＦどれみグループボランティア活動を通してー」

[卒業式]　2013 年 3 月 15 日（金）10：00～　　報告者：宍戸　聡純

学位記授与式の式場で、青森大学学長　崎谷康文先生より、「これからは青森大学が母校です。」と告げられたことに大きな感銘を受けた卒業生でした。

式終了後、思い出の詰まった 4 号館 425 教室で、先生方と最後の言葉を交わし、全員でまた会う日を誓って記念写真に収めました。

最後の卒業生が旅立ちました。

[青森短期大学の思い出]

（学長　木村　雅大）

青森短期大学商経科が開学した昭和 37 年から 51 年の年月が経ちました。多くの卒業生・教職員そして関係各位に支えられ最後の日を迎えました。これまでのご指導ご鞭撻、心より御礼申し上げます。

青森短期大学の学び舎は閉じることになりますが、青森短期大学の卒業生の皆様にはこの学び舎は記憶として永遠に残り続けます。

本当にありがとうございました。

（部長　宍戸　聡純）

昭和 62 年 4 月、初めて教壇に立ち学生と向かい合った日を鮮明に覚えています。あれから 26 年、月日はあっという間に過ぎ去ってしまいました。学生と過ごしたこの年月は、私の大きな宝です。この宝を一生大事にさせていただきます。また、教職員の皆様にも大変お世話になりました。心より感謝申し上げます。

（ビジネス専攻主任　野﨑　剛）

青森短期大学は 1962（昭和 37）年に青森短期大学商経科として開学し、その後学科名を変更するなどして、2013（平成 25）年に 50 年の幕を閉じました。

私が青森短期大学で教えることになったのが 1996（平成 8）、当時は商経科の時代でした。今と同じく歴史学と図書館学の司書関連科目を教えることになったのですが、まさにその年に司書科目が大幅に変わる

ことになり、最初から授業の準備に四苦八苦しました。何故か青森大学に移った今年も、再び司書科目が大きく変わることになり、短大に入った当時と同じ状況になり、あの頃の状況を思い出す日々を送っています。歴史は繰り返すものですね。

短大では 2003（平成 15）年に大幅なカリキュラム改革を実施し、翌年にはそれに伴って、商経科からビジネス創造学科への学科名変更、翌年には保育士養成課程の設置、さらに翌年には地域創造学科に名称変更と、短大を新しく生まれ変わらせる努力が続けられました。

この頃は短大で五所川原の立佞武多の制作に参加したり、川嶋大史さんや角田周さんのような地域で活動しておられる方々を講師に迎えた授業を開講するなど、新しい試みを活発にやっていました。学生とねぶた・ねぷたの図書館づくりを始めたのもこの頃でした。残念ながら外部の講師の参加は 2 年程で中止されました。もう少し継続していたら、地域創造学科という学科名にふさわしい新しい芽が出て、短大の新しい魅力につながったかもしれません。今思い返すと、そのことが残念でなりませんが、今大学でおこなわれている様々な地域との結びつきを探る試みを見ていると、あの頃に見ていた夢がやっとかなうのかなという気がしています。短大はなくなっても、何か大切なものが大学を始めとした学園内に残ってくれればと考えています。